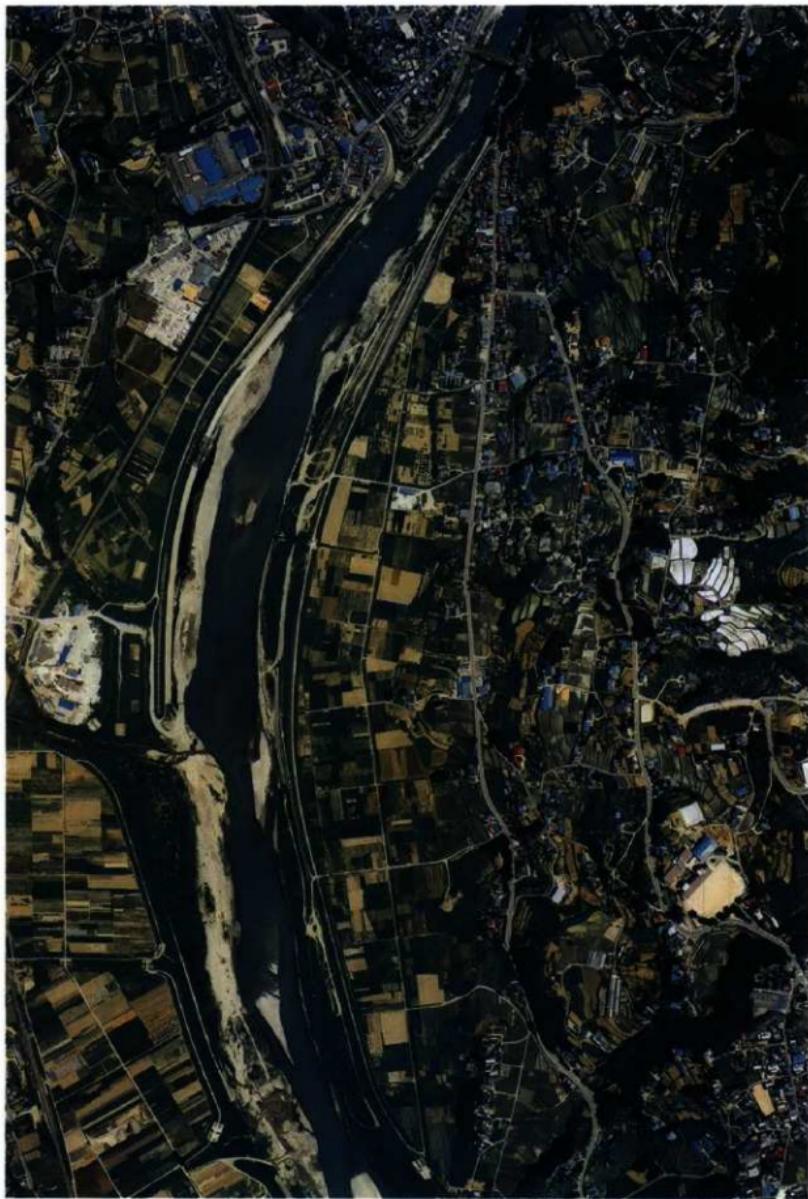


たつえじょう たつえあだかいせき
龍江城・龍江阿高遺跡

平成9年3月

長野県飯田市教育委員会



龍江地区全景（平成元年6月撮影）

序

飯田市は山紫水明の自然環境に恵まれ、原始・古代より多くの人々が生活を営んできた地域であります。調査が行われた飯田市龍江地区は、昔から三六灾害に代表されるような天竜川による水害を受けており、水害対策が長年の懸案であった土地柄と聞いております。そこで、低地を埋め立てて、安心して暮らせる土地にしようとするのが治水対策事業です。

しかし埋め立てることによって我々の先祖の暮らした痕跡が地中奥深くに眠ってしまうことになり、その確認がほぼ不可能になってしまいます。文化財保護の立場からはその是非について今更言うまでもないことですが、現代～未来の人々にとっては治水対策はやむを得ない当然の権利と言えます。よって何度も亘る埋蔵文化財保護協議を重ね、保存できるものは保存し、深く埋め立てられてしまうものについては記録保存によって後世に残す方法にいたしました。このような発掘調査の積み重ねによって地域の歴史の再構築が行われ、ひいてはその成果が私たちの生活に還元されていくものであります。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った飯田市治水対策部、土地所有者の方・地元の皆様・現地・整理作業に従事された作業員の皆様に深甚なる謝意を申し上げる次第であります。

平成9年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本報告書は天竜川治水対策事業に伴い実施された、飯田市龍江地区所在の埋蔵文化財方包蔵地龍江城遺跡・龍江阿高遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市治水対策部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成5・6・7年度現地作業を、8年度整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 遺跡名は、現地調査中に飯田市教育委員会に於いて市内遺跡詳細分布調査を行い、遺跡範囲及び遺跡名の変更があったため、現地作業・整理作業・報告書作成時にそれぞれ異なった略号を用い、次頁に表として記述してある。なお、本報告書に用いている遺跡名は市内遺跡詳細分布調査の成果による。
5. 今年度に於いては、龍江城・龍江阿高・田中下遺跡の報告を求められているが、発掘調査報告書は『龍江城・龍江阿高遺跡』と『田中下遺跡』の2分冊とし、3遺跡に共通する記述（I調査の経過 II遺跡の環境）については、『龍江城・龍江阿高遺跡』に記述し、『田中下遺跡』報告書に於いては省略した。
6. 龍江城・龍江阿高・田中下遺跡に於ける発掘調査位置は国土基本図の区画、M.C-05にそれぞれ位置し（社団法人日本測量協会 1969 「国土基本図図式 同適用規定」 参照）、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託した。
7. 本書の記載については現地作業時に使用した地区毎、遺構の順とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物図版・写真図版は本文末に一括した。
8. 本書は吉川 豊・馬場保之・吉川金利・下平博行が執筆し、文末に表記してある。編集は吉川金利が行い、小林正春が総括した。
9. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

遺跡名対照表

調査時点 遺跡名		注記名	報告書記載名	
龍江城遺跡	T J Y A地区	T C I · A	龍江城遺跡	T J Y A地区
	T J Y B地区	T C I · B		T J Y B地区
	T J Y aトレンチ	T C I · a		T J Y aトレンチ
龍江城遺跡	T J Y C地区	T C I · C	龍江城遺跡	T A D A地区
	T J Y D地区	T C I · D		T A D B地区
	T J Y D地区Iトレンチ	T C I · D I トレ		T A D B地区Iトレンチ
	T J Y D地区IIトレンチ	T C I · D II トレ		T A D B地区IIトレンチ
	T J Y D地区IIIトレンチ	T C I · D III トレ		T A D B地区IIIトレンチ
	T J Y eトレンチ	T C I · eトレ		T A D A地区
	T J Y h I トレンチ	T C I · h I トレ		T A D h I トレンチ
	T J Y h II トレンチ	T C I · h II トレ		T A D h II トレンチ
	T J Y h III トレンチ	T C I · h III トレ		T A D h III トレンチ
龍江城遺跡	T A D A地区	T C II · A	田中下遺跡	T K S A地区
	T A D aトレンチ	T C II aトレ		T K S B地区
	T A D bトレンチ	T C II bトレ		T K S B地区
	T A D cトレンチ	T C II cトレ		T K S B地区
	T A D dトレンチ	T C II dトレ		T K S B地区
	T A D eトレンチ	T C II eトレ		T K S B地区
	T A D fトレンチ	T C II fトレ		T K S B地区
	T A D gトレンチ	T C II gトレ		T K S B地区
	T A D hトレンチ	T C II hトレ		T K S B地区
	T A D iトレンチ	T C II iトレ		T K S B地区
龍江細新(2)遺跡	T A D B地区	T C II · B		T K S B地区
	THA(2) A地区	T C III · A	跡	T K S C地区
	THA(2) A地区Iトレンチ	T C III A I トレ		T K S C地区Iトレンチ
	THA(2) A地区IIトレンチ	T C III A II トレ		T K S C地区IIトレンチ
	THA(2) A地区IIIトレンチ	T C III A III トレ		T K S C地区IIIトレンチ
	THA(2) aトレンチ	T C III aトレ		T K S aトレンチ
	THA(2) bトレンチ	T C III bトレ		T K S bトレンチ

目 次

序		(2) 土坑	14
例 言		①土坑 1	
目 次		(3) ピット	14
I 調査の経過		5. 龍江阿高遺跡B地区	17
1. 調査に至るまでの経過	1	6. 龍江阿高遺跡B地区 I～Ⅲトレンチ	17
2. 調査の経過	1	7. 龍江阿高遺跡 h I～Ⅲトレンチ	17
(1) 龍江城遺跡			
(2) 龍江阿高遺跡			
(3) 田中下遺跡			
3. 調査組織	2		
II 遺跡の環境			
1. 自然環境	5	IV まとめ	
2. 歴史環境	5	1. 龍江城遺跡	23
III 調査の結果		2. 龍江阿高遺跡	24
1. 龍江城遺跡A地区	9	図 版	25
(1) 抗を有する石垣遺構	9	写真図版	45
(2) 溝址	9	報告書抄録	66
①溝址 1	9		
(3) ピット	9		
2. 龍江城遺跡B地区	9		
3. 龍江城遺跡a トレンチ	9		
4. 龍江阿高遺跡A地区	14		
(1) 溝址	14		
①溝址 1			
②溝址 2			
③溝址 3			
④溝址 4			
⑤溝址 5			
⑥溝址 6			
⑦溝址 7			
⑧溝址 8			

I 調査の経過

1. 調査に至るまでの経過

龍江城・阿高遺跡が所在する飯田市龍江地区は、伊那盆地の再南端の天竜川左岸に位置し、下流には天竜峡という狭窄部のある地域である。このため当該地区的天竜川氾濫源・低位段丘は過去幾度となく洪水にあっており、土砂を多量に含む洪水が大きな課題となっていたのである。

そこで対岸の竜丘・川路地区を含めた当該地では、昭和36年に見舞われた水害（36災害）時の被害状況を勘査して「天竜川治水対策事業」を行うことになった。

この事業は、前述した36災害時に浸水した高さまで埋め立てをするもので、事業対象地には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在する。そのため、その保護について長野県教育委員会文化課・飯田市治水対策部・飯田市教育委員会の三者によって、昭和61年10月16日に最初の保護協議を行い、以後数回に亘る協議を経て、平成4年度に事業地内の遺跡に於いて、その状況を把握するため試掘調査を行った。

そして平成5年3月9日に行われた保護協議及び同年5月6日の文化庁の指導を受けて、平成5年5月19日付5教文第7-21号による県教育委員会からの回答で同事業に係る埋蔵文化財の保護について下記の前提が提示された。

- ・原則として試掘調査により把握された遺構確認面及び遺物包含層から2mを越える盛土の範囲は発掘調査を行い記録保存を計る。
- ・2m以下の盛土の範囲についてはトレントによる確認調査を実施し、遺跡の状況を把握し地下遺構の保存を講ずると共にその判断された内容を記録保存し、後世に伝える。

これらの回答に基づき発掘調査及び確認調査が行われることとなった。

2. 調査の経過

(1) 龍江城遺跡

・A地区

当地区は建造物・作物の関係から一度に調査ができなかったため、平成5年12月15日より調査区南側を人力によって表土剥ぎをおこなった。建物・作物の撤去の完了次第、順次重機により表土剥ぎ並びに作業員による遺構検出及び掘削を行い、平成6年3月6日に調査が終了した。なお、基準点測量・遺構測量・空中写真撮影は委託した。

・B地区

平成6年4月21日に重機にて表土剥ぎを行い、翌22日に遺構検出作業を行ったが、表土の下層は黄褐色砂土が続き、遺構・遺物とも検出されなかった。

・a トレント

平成5年12月16日に人力で掘り下げたが基盤面まで深かったため、後日重機にて掘削したが基盤面まで掘り切れなかった。

(2) 龍江阿高遺跡

・A地区

平成6年1月21日より重機による表土剥ぎを行い、同27日から作業員による調査を行った。また、現場に於いて龍江城遺跡d・eトレンチとして調査した箇所は、龍江阿高遺跡A地区として本報告書では取り扱う。なお、同トレンチは平成5年12月16日・6年1月10日から調査を開始している。トレンチを含め全日程が終了したのは2月26日である。

・B地区 (I・II・IIIトレンチ)

周囲の遺構の状況から当地区は微高地のみ面的調査を行い、低地についてはトレンチ調査を行い、6年1月31日から調査を行い、2月17日に終了した。なお、調査区に於いては遺構は確認されなかった。

・h I・II・IIIトレンチ

平成6年10月13日に重機によりトレンチを設定し、表土剥ぎを行ったが御庵沢川の旧流路にあたり、砂礫層が下層まで続き、調査不要と判断した。

(3) 田中下遺跡

・A地区

平成6年2月9日に重機により表土剥ぎを行い、それに並行して作業員による遺構検出作業を行った。調査途中で埋立工事の日程により他地区及び他遺跡の調査を行った関係があり、平成6年7月5日に一部の測量を残したが、調査を終了した。

・B地区

当該地区は当初調査予定ではなかったが、平成6年5月9日から開始した遺構確認調査(TADA～iトレンチ)により多数の遺構・遺物が検出されたため、関係諸機関との調整を図り、6月28日より確認調査の結果を基に面的調査を行った。その結果、当初の予定より遙かに多くの遺構・遺物の確認があり、大きな成果を得て11月1に調査を終了した。なお、調査の成果を地域住民に還元すべく10月30日に現地見学会を開催し、多数の参加が得られた。

・C地区 C地区I～IIIトレンチ a・bトレンチ

平成6年5月13日に当該区を重機により表土剥ぎを行った結果、調査対象区のほぼ1/3が湿地であったため、湿地の箇所はトレンチ調査を行い(C地区I～IIIトレンチ)、土層の堆積状況の観察を行った。遺構検出作業は6月23日より行い、7月19日に全景写真を撮影して終了した。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 佐合英治(～6.3) 馬場保之 吉川金利 下平博行

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川 豊 山下誠一(6.4～) 吉川金利 渋谷恵美子(～6.3) 福澤好晃 下平博行 伊藤尚志(6.10～) 上沼由彦(7.4～)

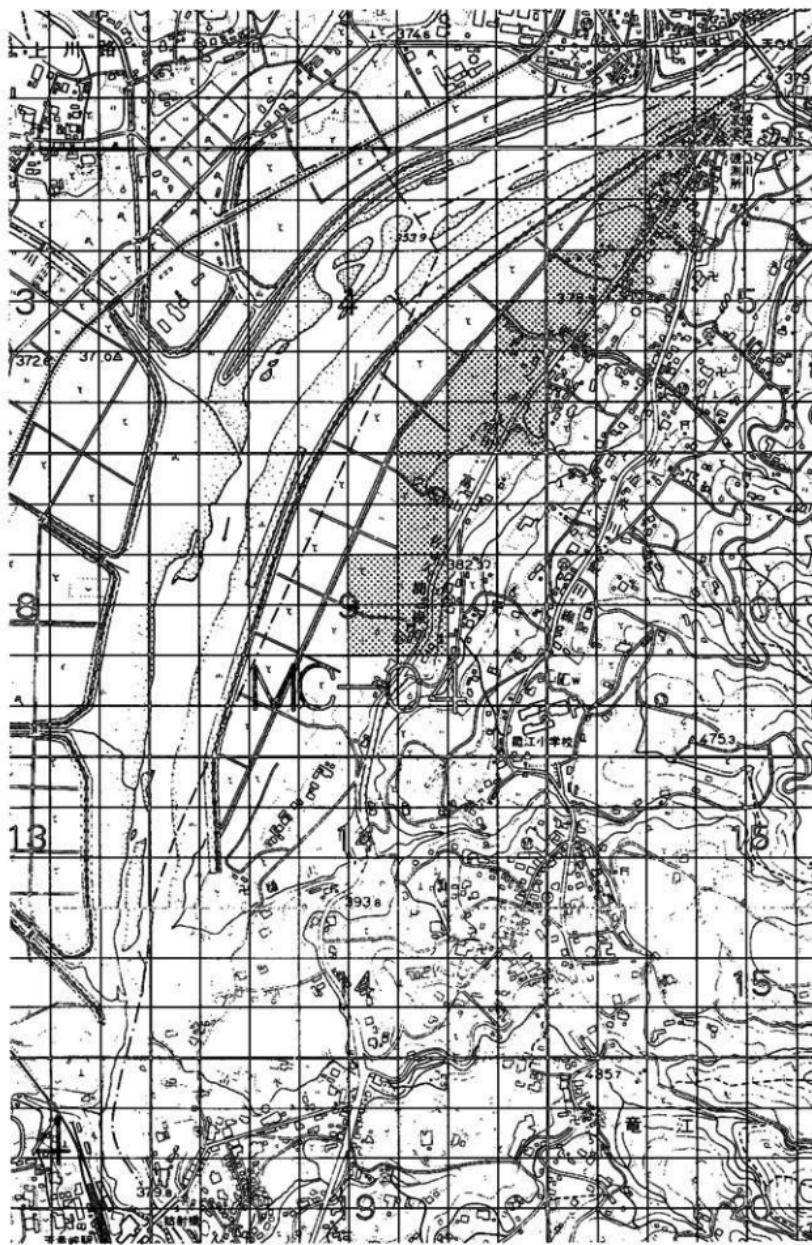
作業員 青島里之 新井幸子 新井ゆり子 池田幸子 池戸智恵子 市瀬 忠 市瀬長年
市瀬房吉 伊坪 節 伊藤徳七 伊藤博紀 伊東裕子 井上恵資 井上晃一 今村勝次
今村治子 氏井 享 太田沢男 大原千和喜 岡島三男 岡島 巨 奥村栄子
尾曾ちぶき 恩沢不二子 金井照子 金子正子 金子裕子 唐沢恭子 唐沢古千代

川手周三 北川 彰 北沢兼雄 吉地武虎 北原 裕 木下賢一 木下早苗 木下貞子
木下千秋 木下 傳 木下義男 木下良子 木下力弥 木下 玲子 植原亜紀子
植原勝子 熊谷みゆき 熊谷義章 熊崎三代吉 小池金太郎 小池千津子 小島幸子
小平不二子 小林定雄 小林千枝 小室睦子 斎藤喜千 斎藤千里 斎藤徳子
坂井勇雄 植原政夫 坂下やすゑ 佐々木文茂 佐々木真奈美 佐々木 守
佐々木美千枝 佐藤知代子 塩沢澄子 塩沢 節 斯波幸枝 島岡敬子 清水三郎
清水ひろ子 清水光朗 下田英美子 代田和登 菅沼和加子 鈴木重雄 鈴木草子
鈴木道也 関島真由美 潟古郁保 高橋収二郎 高橋セキ子 滝上正一 竹本常子
田中 薫 田中恵子 田中利男 塚原次郎 筒井治雄 鶴岡照儀 遠山重男 遠山政男
常磐昭夫 中田亀男 仲田昭平 中平隆雄 鳴海紀彦 丹羽由美 服部光男 林 和人
林 悟史 林千二三 林 福男 林田加代子 原 淳 原田四郎八 久田きぬゑ
久田智美 久田 誠 橋本宣子 広井 保 平栗陽子 平松正子 福沢章子 福沢育子
福沢 黙 福沢幸子 福沢トシ子 福沢 誠 福島みゆき 福本静雄 福本まさ志
藤本 宏 古根素子 細田七郎 牧内郁代 牧内 修 牧内喜久子 牧内達雄
牧内八代 増山局武 松井明治 松下金誓 松下成司 松下直市 松下真幸 松下光利
松島直美 松島なみ 松田 猛 松村かつみ 松本恭子 三浦 厚子 溝上 清見
南井則子 宮内真理子 宮下貞一 森 章 森藤美知子 矢沢 博志 山田 康夫
吉川悦子 吉川和夫 吉川紀美子 吉川小夜子 吉沢佐紀子 吉沢さと 吉沢二郎
依田時子 渡辺幸子 渡辺直子

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課（～8. 6） 博物館課（8. 7～）

安野 節（社会教育課長～6. 3）
横田 穂（ “ 6. 4～）
矢沢 与平（博物館課課長 8. 7～）
原田 吉樹（社会教育課文化係長～6. 3）
小林 正春（ “ 6. 4～・博物館課埋蔵文化財係長 8. 7～）
吉川 豊（社会教育課文化係～8. 6・博物館課埋蔵文化財係 8. 7～）
山下 誠一（ “ 6. 4～ “ ）
馬場 保之（社会教育課文化係～8. 6・博物館課埋蔵文化財係 8. 7～）
吉川 金利（ “ “ ）
渋谷恵美子（社会教育課文化係～6. 3）
福澤 好晃（社会教育課文化係～8. 6・博物館課埋蔵文化財係 8. 7～）
下平 博行（ “ “ ）
伊藤 尚志（ “ 6. 10～ “ ）
上沼 由彦（（財）長野県埋蔵文化財センターより出向 7. 4～ “ ）
岡田 茂子（社会教育課社会教育係～8. 6）
牧内 功（博物館課庶務係 8. 7～）



挿図1 基準メッシュ図区画調査位置図

II 遺跡の環境

1. 自然環境（挿図2・3）

飯田市龍江地区は、飯田市街地から南東へ約4kmに位置し、天竜川の東側に広がる地区である。北は駒ヶ沢川で下久堅地区と、南は紅葉川で千代地区と境界を接している。東は伊那山地の海拔700m程度の頂でやはり上久堅・千代地区と境を接している。

伊那谷の基本的な地形は、断層運動により形成された構造段丘と、天竜川の侵食により形成された河岸段丘が組み合わされた、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向の段丘地形を特徴としている。これらの段丘を切る方向に小河川が流れ、それらにより形成される扇状地があちらこちらにみられ、かなり複雑な様相を呈している。竜東地区は山地がせまり小河川の落差が大きく、平坦部分は少ない。

龍江地区の最下段は天竜川の氾濫原であり、現在治水対策事業が実施されている。昭和36年の災害で土砂の堆積・流失があったため、前地形がわからないが、主要地方道飯田・富山・佐久間線が通る段丘面との差はかなりあったと考えられる。この主要地方道飯田・富山・佐久間線が乗る段丘面は天竜橋から姑射橋まで細長く伸びている。

その上段部にも天竜川に平行方向（ほぼ南北方向）に天竜川に向かって緩やかに傾斜した段丘面をみるとることができる。これらは、小河川（北から塩田沢川・城沢川・蟹沢川・御庵沢川・樋沢川・清水川・大平沢川）により、いくつかに寸断されており、それほどの広さはない。その東側は、伊那山地の前山である高森山・雲母丘陵から延びる尾根上に平坦地がいくつかある。

気候面でみれば、伊那谷は比較的温湿であり、龍江地区は飯田市の中でも温暖な地域のひとつである。平均気温は、13°Cに近く、降水量も年間1,600mm程度である。

2. 歴史環境（挿図2・3）

龍江地区での発掘調査はこれまでほとんど実施されていないため、古代・中世は不明な点が多い。縄文時代前期としては、中段に位置する龍江大平遺跡（5）で中葉の黒浜式併行期の竪穴住居址が3軒調査された。さらに、下段の田中下遺跡（3）では前期の集石炉や遺物包含層が確認されており、付近に集落が存在する可能性がある。中期以降の発掘調査例はほとんどなく、下段の氾濫原に面した龍江城遺跡（1）では、流れ込みと思われる中期～晚期の遺物が、龍江細新遺跡（4）では中期・後期の遺物が確認されている。

弥生時代・古墳時代の集落は、天竜川沿いの下段を中心に広く分布しているものと考えられる。田中下遺跡では集落や方形周溝墓群が、また、龍江細新遺跡では弥生時代から古墳時代後期にかけての大規模な集落が調査された。また、古墳は、多くは中段の段丘崖縁部に築造されており、10基の存在が知られているが、現存するものはハンバ古墳（6）・石原古墳（7）・羽入田原古墳（8）の3基にすぎない。記録に拠ると、後期に属する小規模の円墳が多い。

龍江地区東寄りの高森山の尾根と尾根の間の洞には、平安時代須恵器の窯跡の存在が知られており、御殿田窯跡（9）・上の城窯跡（10）はすでに調査されているが、この他にもう数ヶ所窯跡があり、こ

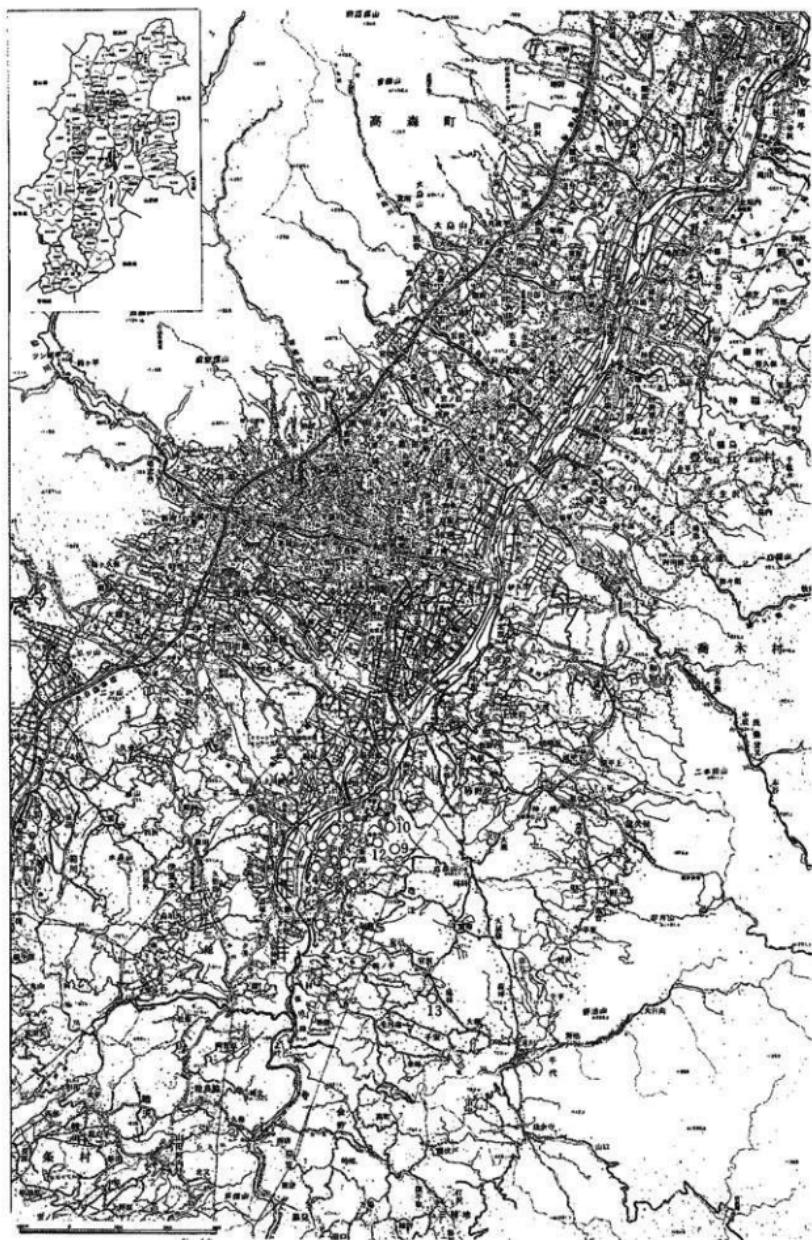
の山地一帯は古窯跡群を形成していたものとみられる。これらの窯跡で生産された須恵器の消費地は天竜川沿いに展開する集落と考えられる。

中世は知久氏の支配に入っていたとみられる。現在一般廃棄物最終処分場がある上城には、兎城と呼ばれている城跡があり、堀・土塁・曲輪が残っている。この城は「今田原城」(11)とも呼ばれており、地区内新地地籍にある春日神社は、南北朝期にここの城主である桃井掃部守定継が建てたと伝えられる。上城付近には「百目」・「二百目」等の地名が残っている。また、高森山から延びた尾根の、神之峰を見通せる地籍は「池の平」と呼ばれ、その突端部は「城山」(12)と呼ばれて堀・曲輪が残っている。周辺には「窯場」・「御殿田」等の地名がある。この城を「上の城」、兎城を「原城」と呼ぶ人もいる。

近世には、地区内尾林に「尾林古窯」(13)と呼ばれる登り窯が操業しており、摺鉢等の日常飯器が焼かれていた。尾林西側斜面にある八幡神社には、かつて『慶安拾四』(1607)年六月日九右衛門の銘をもつ狛犬が奉納されており、飯田市有形文化財に指定されている。県内最古の焼物の狛犬で、三体とも「阿形」を表わす。現在、「尾林焼」と呼ばれる焼き物は「尾林古窯」とはつながりがない。伝承によれば、明治から大正時代にかけて日用品を焼いた窯が八幡神社西側の尾根にあった。それを引き継いだものが現在の「尾林焼」とされる。他に、近代の焼き物として「東焼」がある。窯元であった田中地籍の松島氏の屋号「東」に因み、御庵沢川南側の高森山支陵の「金治ヶ原」に一部残存する。火鉢・壺等の日用雑器を焼いたとの記録があり、龍江地区を中心に流通していたとされる。

近世以降、庶民の娛樂としての地芝居・人形浄瑠璃が盛んに行なわれており、神明社や尾科諏訪神社等各所に芝居に関する施設や記録が残っている。殊に、地区内今田地籍には伊那谷四座のひとつ、今田人形芝居が伝承されており、大宮八幡神社に奉納されている。

龍江地区は、文化・文化財が比較的よく伝承された地域のひとつといえよう。(吉川 豊・馬場保之)



挿図2 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図3 調査位置図及び周辺地図

III 調査の結果

1. 龍江城遺跡A地区

調査に於いて確認された遺構は以下のとおりである。

杭を有する石組遺構	1
溝址	1
ピット	多数

(1) 杭を有する石組遺構（挿図5）

B R - 27を中心として検出した。検出した総延長は13mで主軸はN124° Eを測る。北西側の石は大型のものを用い、南東側は北西側より小型の人頭大の礫を用いて二重に配置し、一部倒れていたものもあるが、25~50°の角度で刃物で加工された杭が打たれていた。南西側にも一列の杭を有する石組が確認された。

遺物は、当該遺構に伴うものとしては非常に少ないが、寛永通宝と「福次郎」「四升」と書かれた荷札と思われる木簡が出土した。その他の遺物は隣接した溝址より混入したものと考えられる。

遺構の性格の詳細は不明であるが、古老の話によると、昔当該地に渡船場があったと言われている。また、地名が「舟渡」であることより、出土遺物等も含め総合すれば、江戸時代～以降の渡船場の可能性が高いことを指摘しておく。（吉川金利）

(2) 溝址

①溝址1（挿図4）

B R - 27を中心として検出した。調査延長は12.5m、方向はN143° Eを測る。幅1~3m・深さ10~50cmで、断面形は不定形である。底に拳大～人頭大の礫が多くあり、自然流路と考えられる。

出土遺物は縄文時代中期終末～平安時代土師器・須恵器、石器と多種多様である。ほぼすべてが上流からの流れ込みである。

時期決定の根拠に欠け明確である。（吉川金利）

(3) ピット（挿図6）

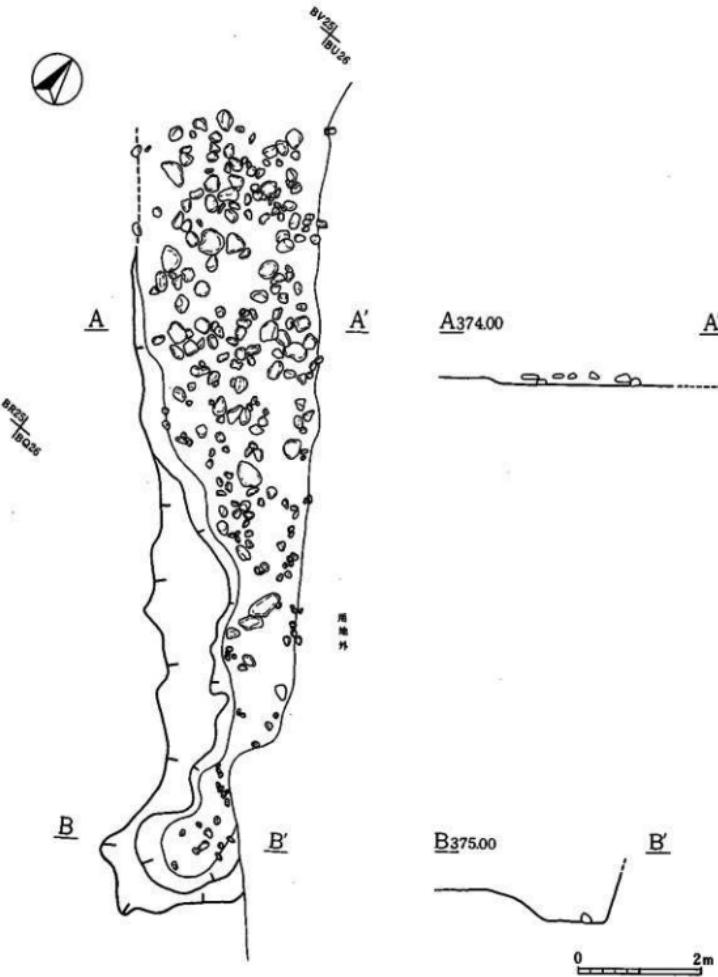
調査区南側で検出された。各々の説明は割愛するが、図面はすべて掲載した。（吉川金利）

2. 龍江城遺跡B地区（挿図2）

「調査の経過」でも触れているが、多くが湿地となっており、トレンチ調査のみで拡張しての調査は不要と判断した。（吉川金利）

3. 龍江城遺跡 a トレンチ（挿図2）

重機にて深掘をしたが安定した遺構検出面まで達することができず、遺構・遺物とも検出されなかつた。（吉川金利）



插図4 T J Y · A 溝址 1



挿図5 T J Y・A 杭を伴う石組遺構

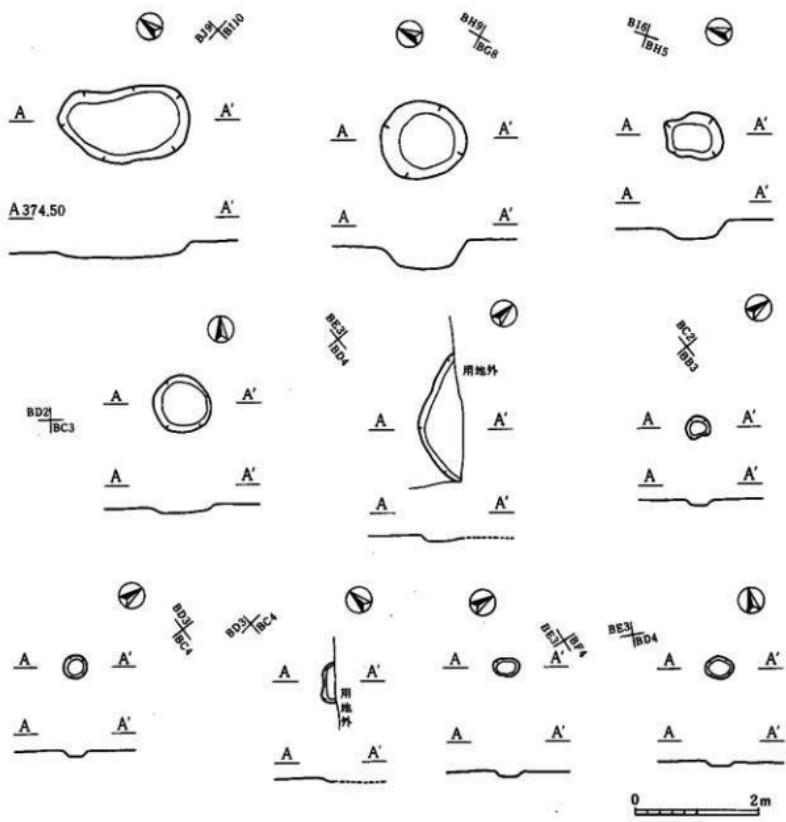


図6 TJY・A ピット

4. 龍江阿高遺跡A地区

調査に於いて確認された遺構は以下のとおりである。

溝址	8
土坑	1

(1) 溝址

No	図No	検出位置	規模長×大幅×大 深 小幅×小深m	主 軸	時代・時期	出 土 遺 物	備 考
1	7	B M-26	(3.2)×1.3×0.07 0.7×0.06	N26° E	不明	なし	自然流路
2	7	B L-28	(7.9)×3.3×0.44 0.65×0.11	N24° E	平安時代 以降	縄文中期深鉢・平安須 恵器壺・甕灰釉陶器・打 製石斧・分銅形石斧・敲 打器等	自然流路
3	7	B I-32	(3.7)×3.4×0.73 2.5×0.48	N27° E	平安時代 以降	縄文土器・弥生中期甕 ・平安須恵器壺 皿 敲打器・打製石廻丁	自然流路
4	7	B L-29	(1.5)×0.5×0.17 0.3×0.3	N27° E	不明	なし	自然流路
5	7	A X-21	(3.9)×1.7×0.17 1.1×0.12	N37° E	平安時代 以降	縄文後期深鉢・弥生後 期甕・奈良壺・平安壺 甕・抉入打製石廻丁・ 横刃形石器	自然流路
6	7	A W-22	(4.9)×0.5×0.36 0.3×0.3	N72° E	平安時代 以降	古墳甕・平安甕	自然流路
7	7	A V-24	(4.2)×0.55×0.16 0.2×0.04	N32° E	不明	なし	自然流路
8	7	A U-25	(4.1)×0.7×0.05 0.2×0.04	N77° E	不明	なし	自然流路

(吉川金利)

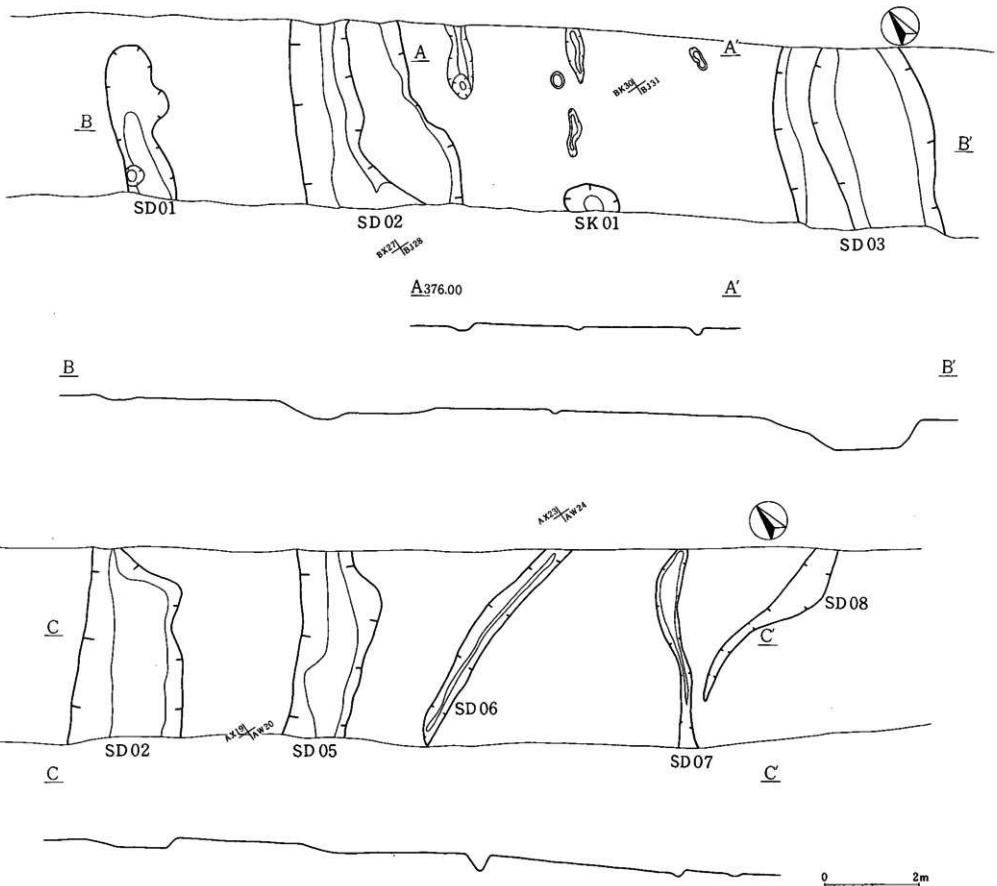
(2) 土坑

①土坑1 (挿図7・図版15)

B J-29を中心として検出し、長軸が112cm・深さ7cmを測る。断面形は逆台形を示す。遺物は横刃
形石器・大型粗製石匙が出土しているが、時期は不明である。

(3) ピット

個々の説明は割愛する。(吉川金利)



插図7 TAD・A 溝址1～8・土坑1

5. 龍江阿高日地区 (挿図3)

前述したように調査対象地区の多くが湿地であったため、微高地の箇所をB地区として調査したが遺構は検出されなかった。(吉川金利)

6. 龍江阿高遺跡B地区 I～Ⅲ地区 (挿図3)

前述したB地区の低地に設定した。予想通り湿地であり、重機で深掘をしたが基盤面まで到達できず、調査を終了した。(吉川金利)

7. 龍江阿高遺跡 h I～Ⅲ トレンチ (挿図3)

前述したように旧御庵沢川の旧流路にあたり砂礫層が下層まで続き調査不要と判断した。(下平博行)

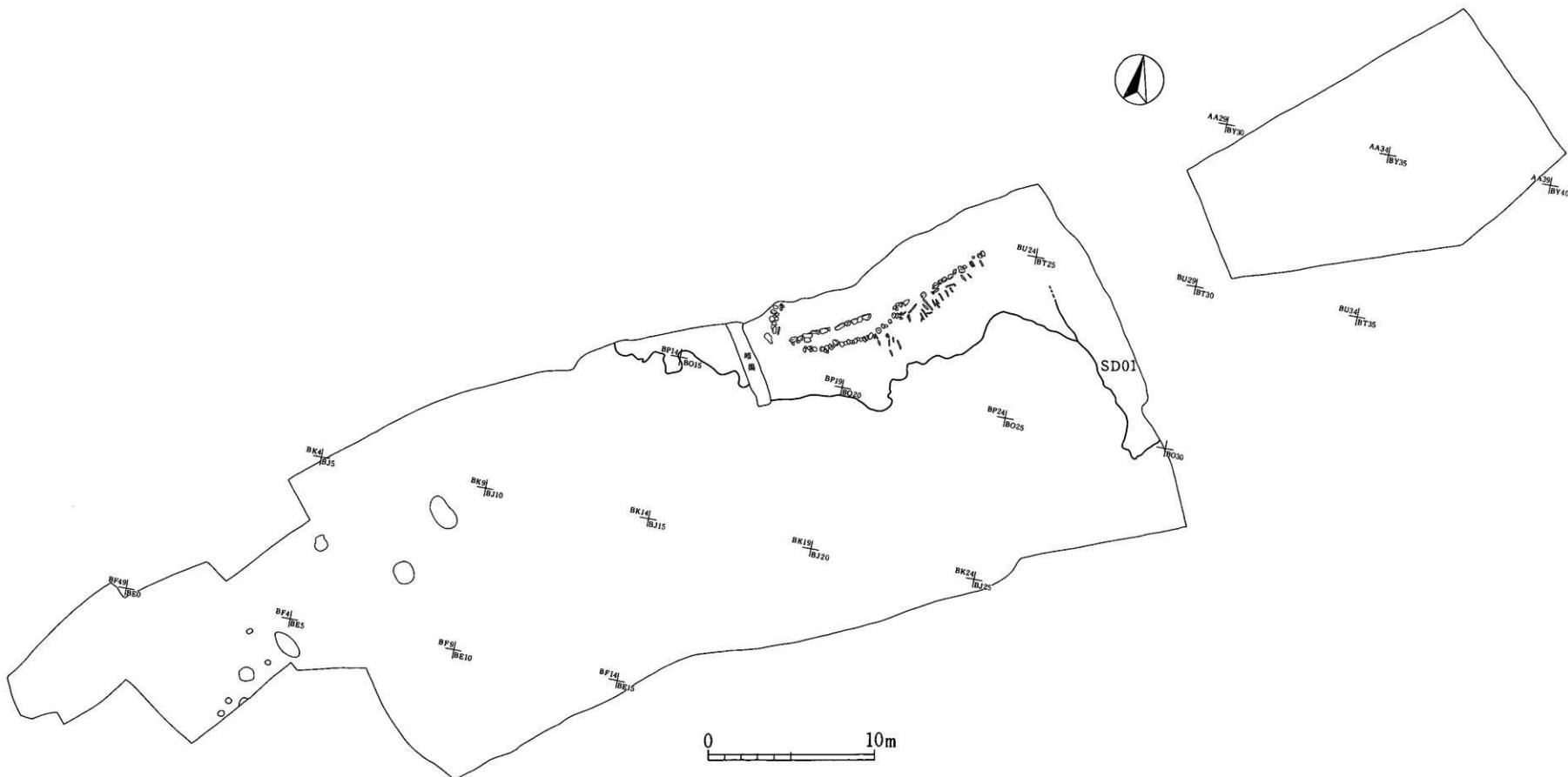
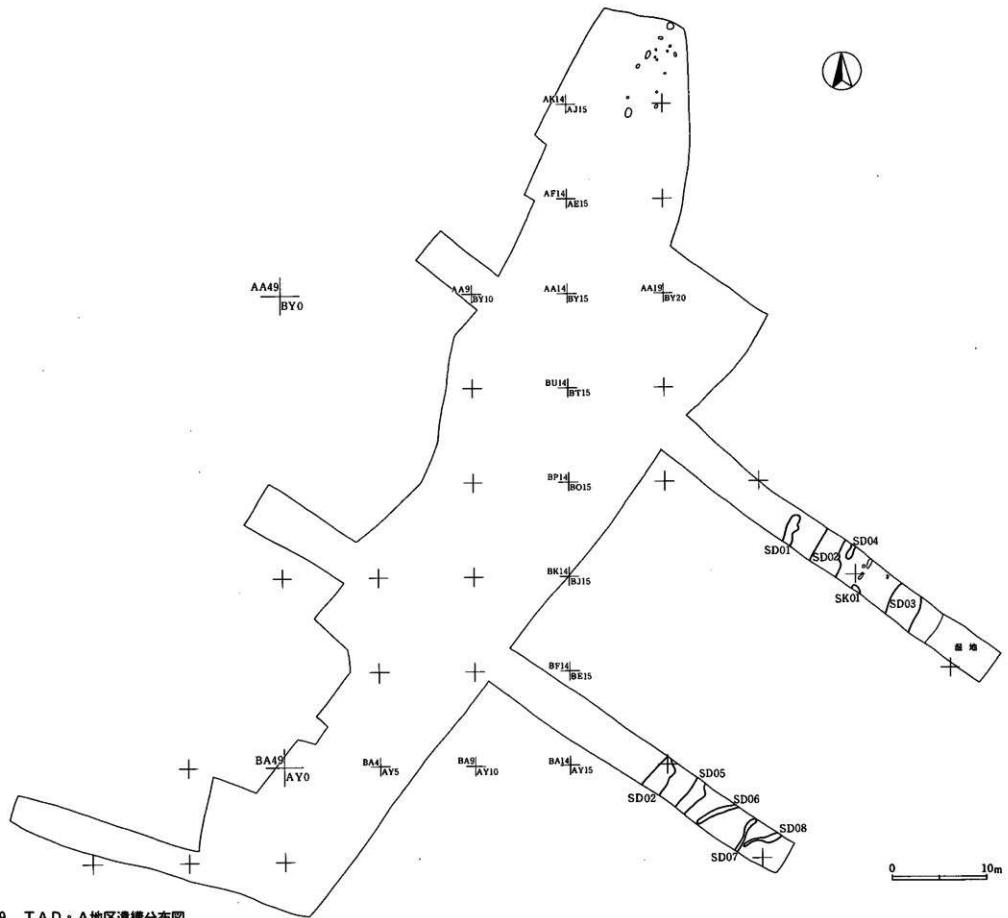


插图8 T J Y · A地区遗物分布图



IV まとめ

各遺跡の調査結果は以上のとおりであるが、遺跡毎・時代毎の概要を記して今次調査のまとめとしたい。

1. 龍江城遺跡

(1) 繩文時代

当該期の遺構は検出されなかったが、遺物は多量に出土している。遺跡全般では、断片的であるが、繩文時代中期後葉から後期～晚期後葉にかけての遺物が出土している。

杭を有する石組み遺構では、1-1～4は底部に網代痕がみられ、このうち1～3は1本超え1本潜り1本送りの網代である。10・11は後期初頭称名寺式、5は前葉堀之内Ⅱ式、9は中葉加曾利BⅢにそれぞれ比定されよう。7は後期後葉に位置づく。

溝址1では中期後葉から晚期後葉にかけての遺物が出土しており、主体は後期後葉から晚期前葉である。2-12は浅鉢形土器、14は三叉文、19・20は入組文が付される。17は隆帯文系で、隆帯上に刺突が施される。10は口縁部に押圧が施される。11は、粗製の深鉢形土器である。

2-22～第4図は粗製深鉢形土器の底部破片を一括した。網代痕は、1本超え1本潜り1本送り(2-23、3-4・5・10・14・15、4-2・6・7・9)、2本超え1本潜り左1本送り(3-2・9・12・13、4-4)、2本超え1本潜り右2本送り(3-3・8、4-1・5・10)が多い。このほか2-22は、縫材が2ないし3条1組の2本超え1本潜り左1本送り、3-1は2本超え3本潜り左1本送り、4-3は2ないし3条1組の2本超え2本潜り1本送り、8は縫材が2条1組の1本超え1本潜り1本送りと考えられる。12-18は木葉痕をどどめる。いずれも後期後葉から晚期前葉を中心とした土器と考えられる。これらの遺物は、いずれも同址に共伴するものでなく上流からの流れ込みと思われ、特に後期～晚期の、図示できなかった粗製土器の小破片等を含めての多量の遺物から、該期の集落が近隣(調査区東側)にあると考えられる。石器はほぼ該期のものと思われるが打製石斧を主として大量に出土している。(馬場保之)

(2) 弥生時代・古墳時代

繩文時代と同様に当該期の遺構は検出されなかった。また遺物も極めて少ない。13-6は抉入打製石庖丁で弥生時代に所属するものと思われるが、当地方に於いては古墳時代の石器使用も確認されているため、断定はできない。溝址1から出土した土器(5-5～7)が古墳時代と考えられるが小破片で詳細は不明である。(吉川金利)

(3) 奈良・平安時代

該期の遺構は検出されていない。溝址1より混入品と思われる遺物と遺構外(5-8～12・24～26)から出土している。5-8～12・24は、須恵器坏で、5-25・26は灰釉陶器の碗である。(吉川金利)

(4) 近世

A地区の杭を伴う石組遺構が該期にあたる。時間的制約から同址の詳細な位置付けができなかった。

「寛永通宝」を時期決定の根拠としたが、文献からの考察が性格決定に関与するものと思われる。いずれも今後の課題としたい。(吉川金利)

2. 龍江阿高遺跡

(1) 繩文時代

遺構は検出されていないが、流れ込みと思われる遺物が少量ある。5-27は所謂平出Ⅲ類A式土器で、5-28は後期初頭の称名寺式系の深鉢と思われる。石器においては打製石斧・石鎌等が遺構外から出土している。

(2) 弥生時代

溝址を中心に出土している。6-10・11は所謂恒川式といわれる中期末の壺であり、櫛描文で構成された文様を持つ土器である。7-8も小片であるが、同時期の壺と思われる。6-21は後期の壺の口縁部、7-4・7は同期壺胴部片である。該期の石器は大量にあり、抉入打製石庖丁(15-1・2・5等)。有肩肩状形石器(15-11~14等)等、収穫具と考えられるものが多く出土している。また、16-8は、磨製石鎌の未製品である。A地区東側は立地状況や出土石器より該期に於いては生産域の可能性が高い。しかし今次調査では集落域の確認まで至らなかったため、当遺跡の弥生時代の詳細な様相は不明である。

(3) 古墳時代

明確に当該期といえる遺構・遺物は確認されていない。

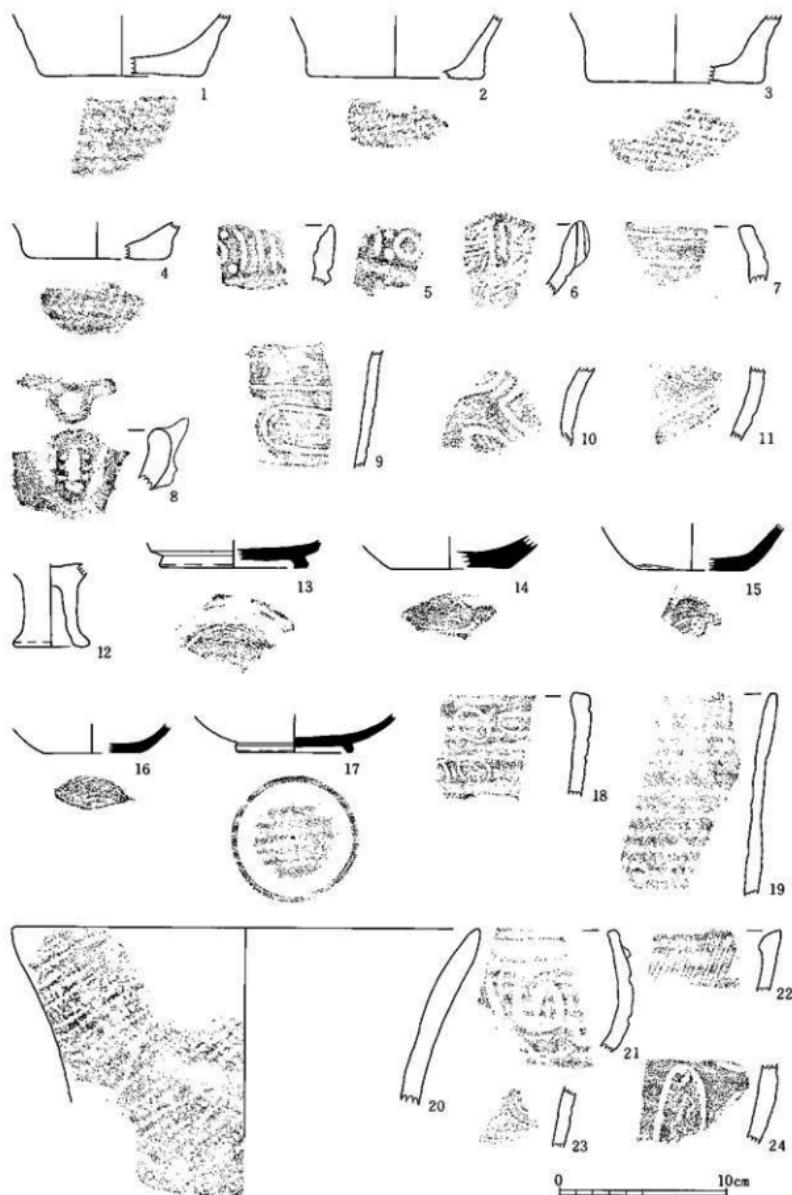
(4) 奈良・平安時代

A地区に於いて確認された溝址及び出土遺物が該当する。溝址は湿地帯中にあり、土層断面。断面形等より自然流路で、人為的なものではないと判断した。なお、この湿地帯は、土層断面を精査したが水田址等は確認できなかった。

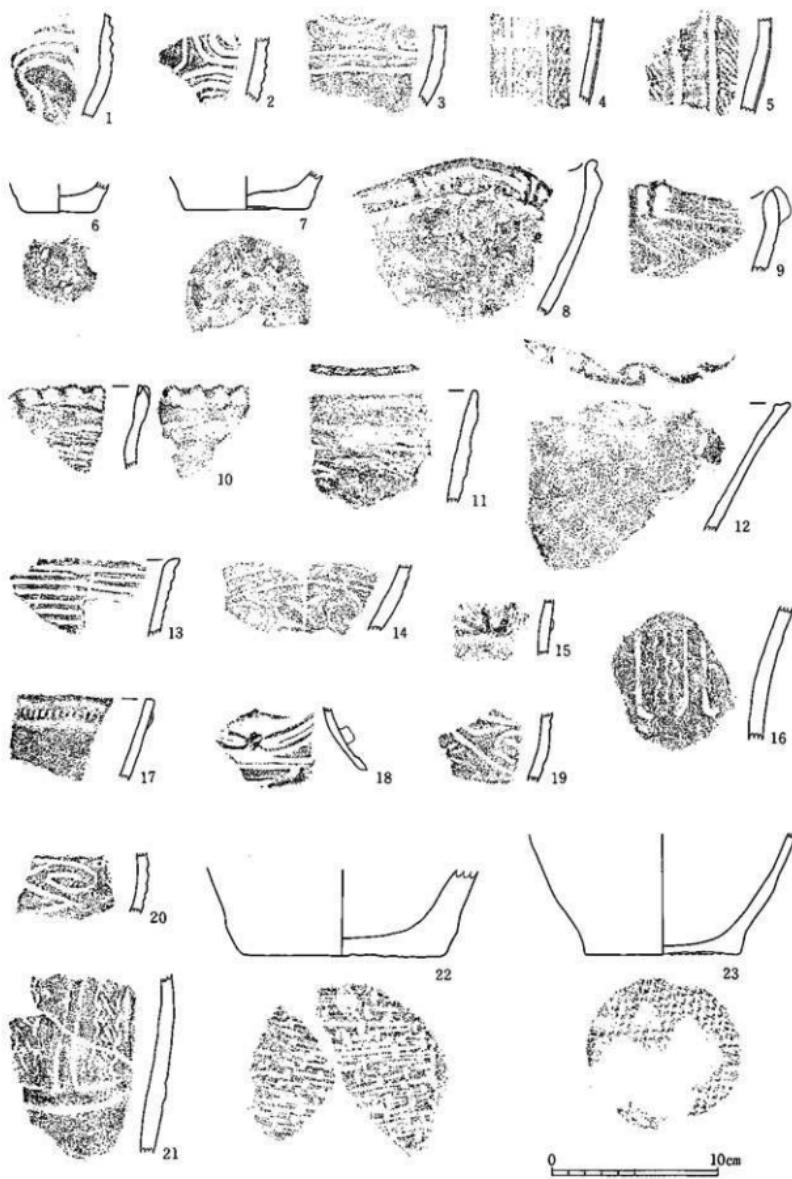
遺物は溝址や遺構外から出土しており、比較的出土量の多い溝址2からは器種は推定できるが須恵器の壺の底部片(5-31~33)や胴部片(6-7・8)、須恵器坏片(6-1~4)、灰釉陶器皿片(6-5)が出土している。いずれも平安時代に位置付けられるようである。また、溝址5と遺構外からは奈良時代と思われる須恵器の坏が出土している(6-19・7-10)。(吉川金利)

以上のように概略的なまとめを行ったが、遺物に関しては小破片が多く、器種・時期等詳細な点は把握できなかった。遺構に関してもその性格が十分に理解できたものは少ない。いずれにせよ今後の課題が多い調査であったが各方面から解決していきたい。

図 版

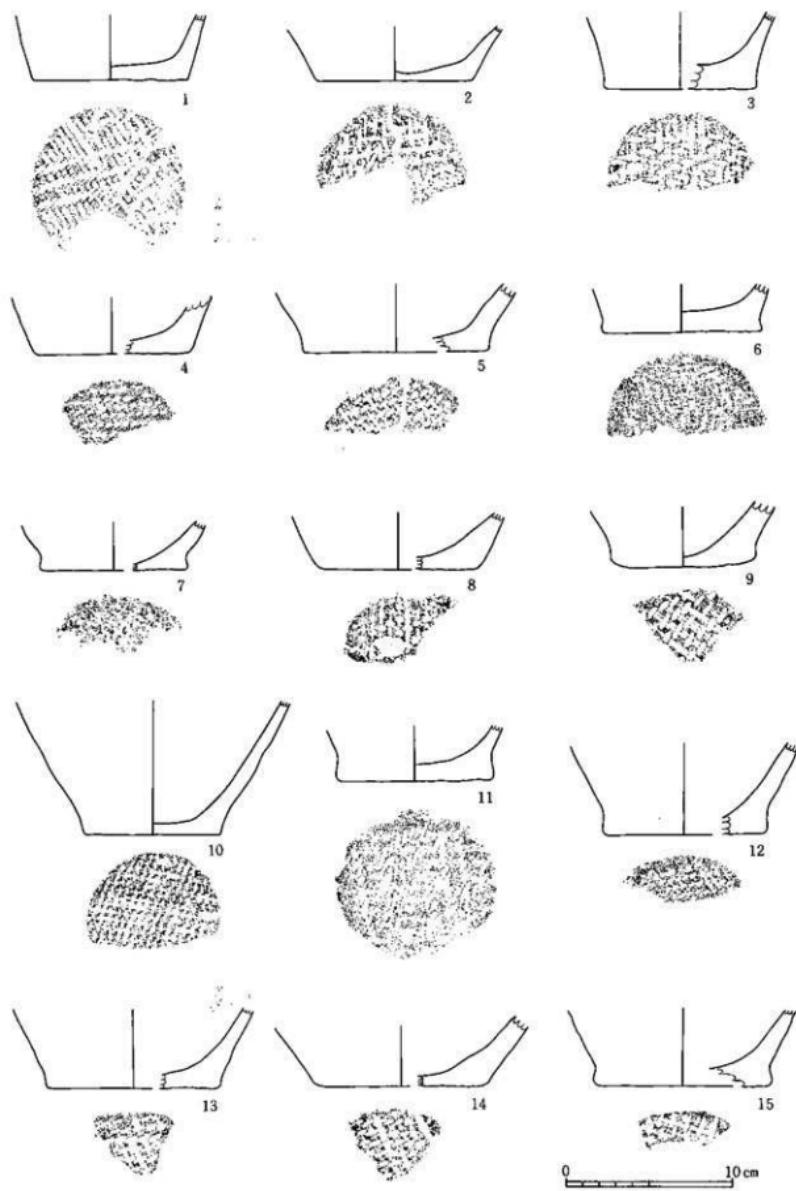


第1図 T J Y - A 杭を伴う石組遺構出土遺物

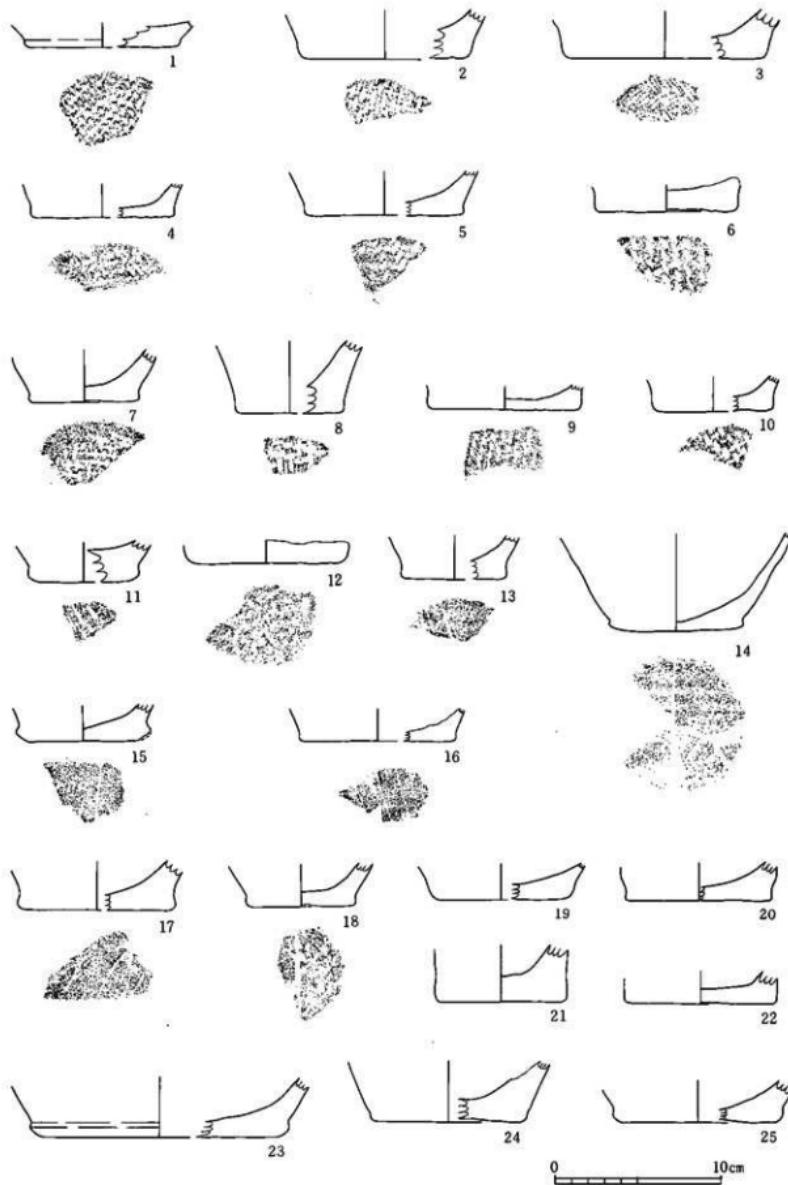


第2図 T J Y • A 出土遺物

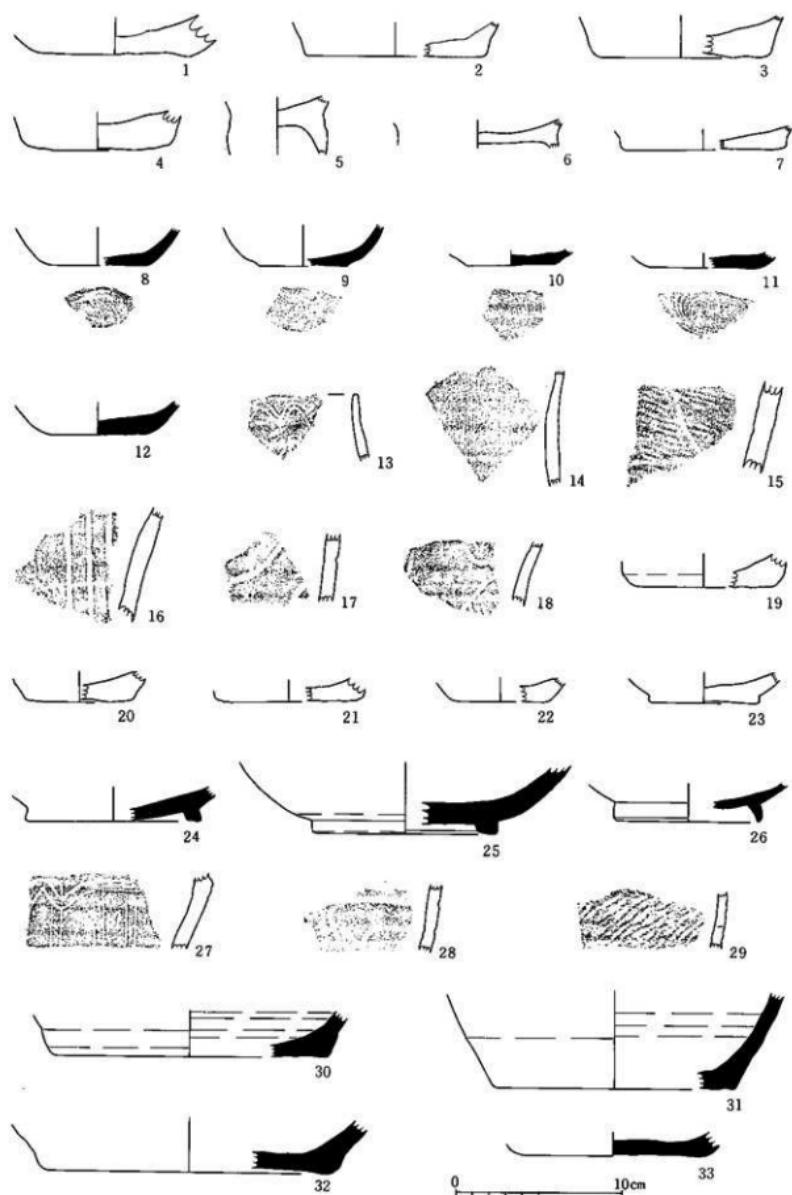
1~7 杖を伴う石組遺構 8~23 清址 1



第3図 T J Y・A 溝址1出土遺物

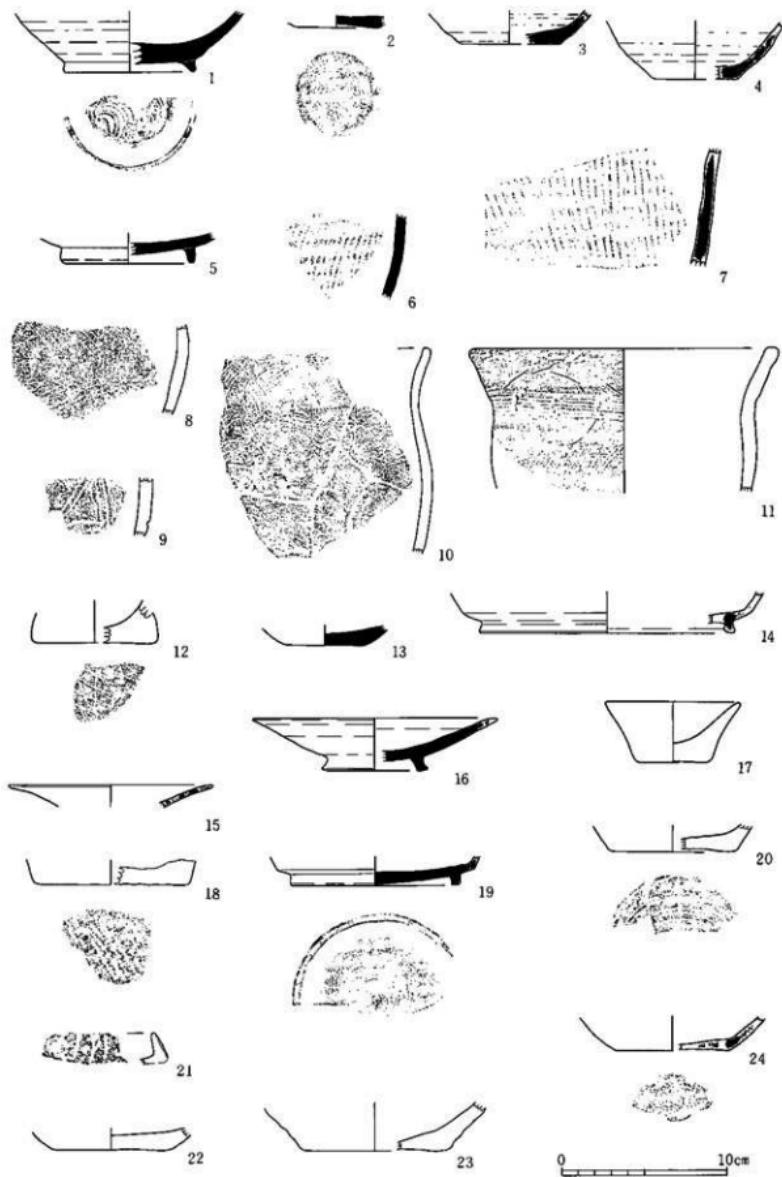


第4図 T J Y · A 溝址1出土遺物



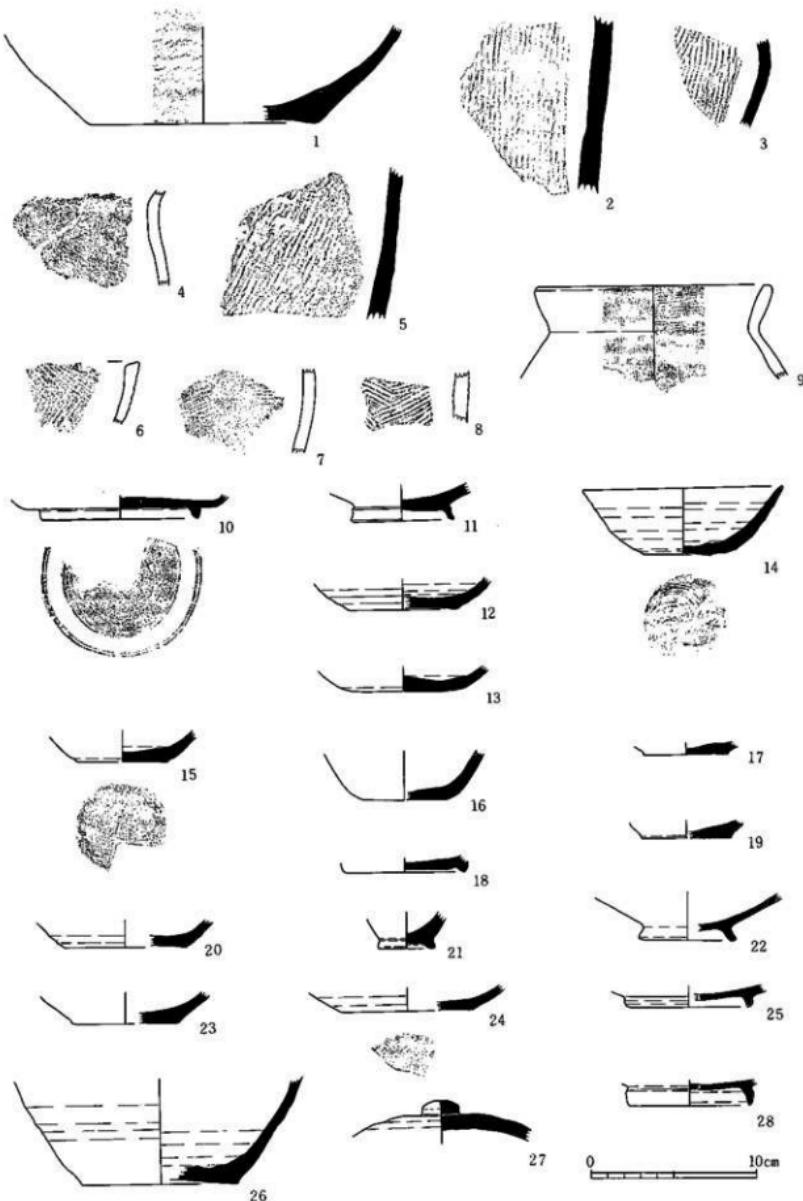
第5図 T J Y・A TAD・A 出土遺物

1~12 T J Y・A 濟址 1 13~26 T J Y・A 道橋外 27~33 T AD・A 濟址 2

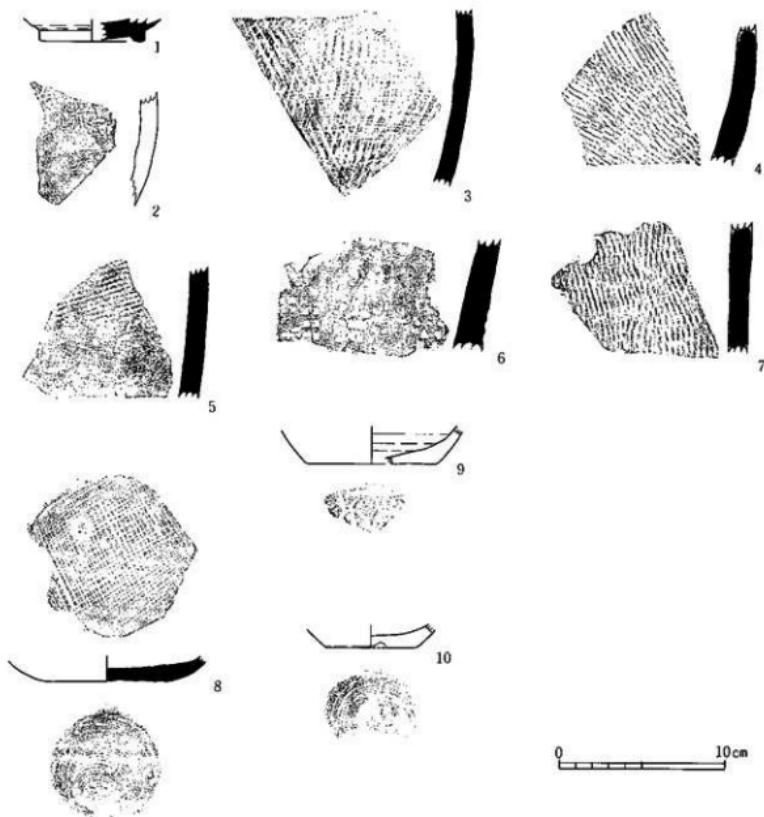


第6図 TAD・A 出土遺物

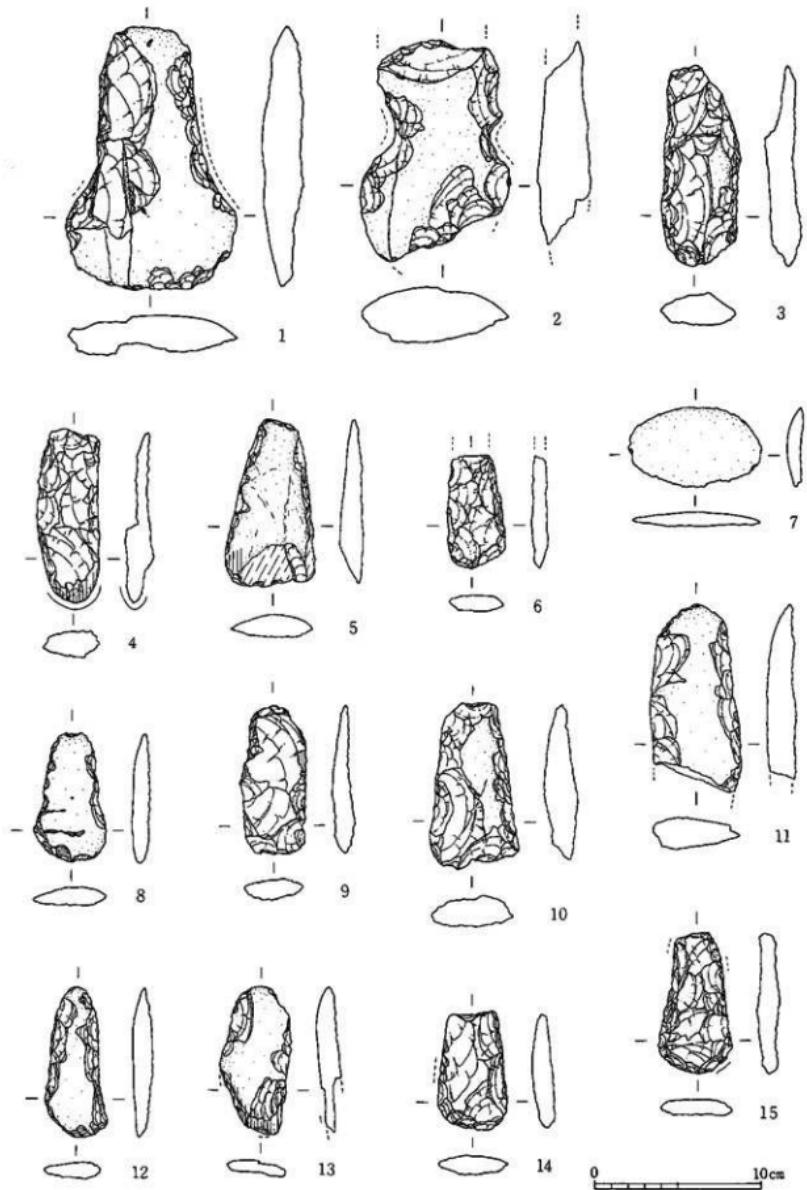
1~7 溝址2 8~17 溝址3 18~23 溝址5



第7図 TAD・A 出土物
1~3 溝址5 4~5 溝址6 6~28 造模外

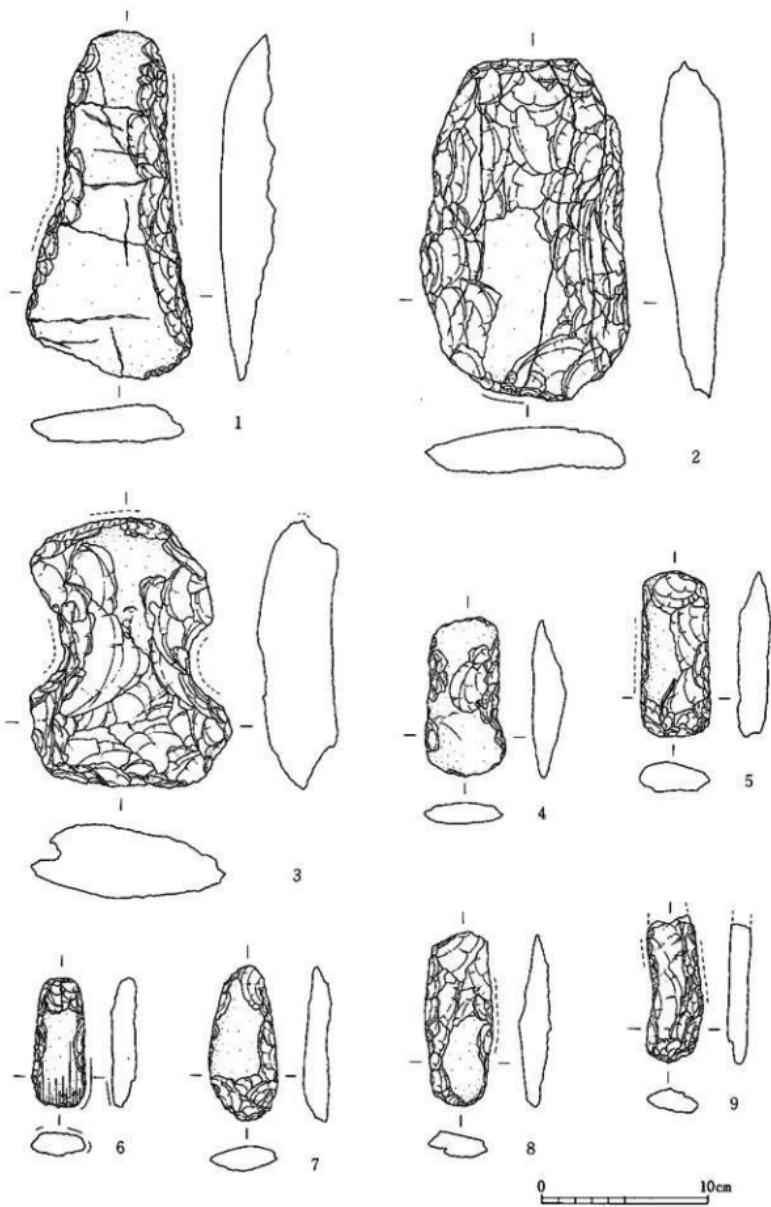


第8図 TAD・A 造構外出土遺物

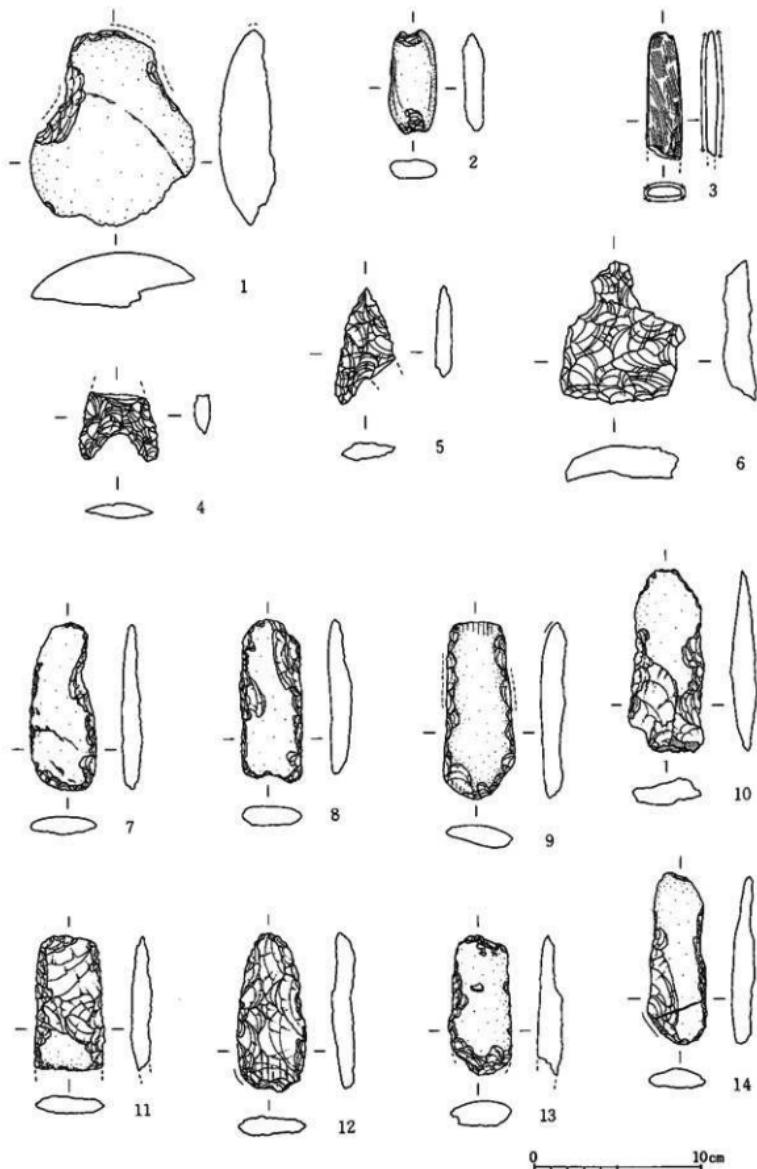


第9図 TJY・A 出土遺物

1~9 杖を伴う石組遺構 10~15 溝址 1

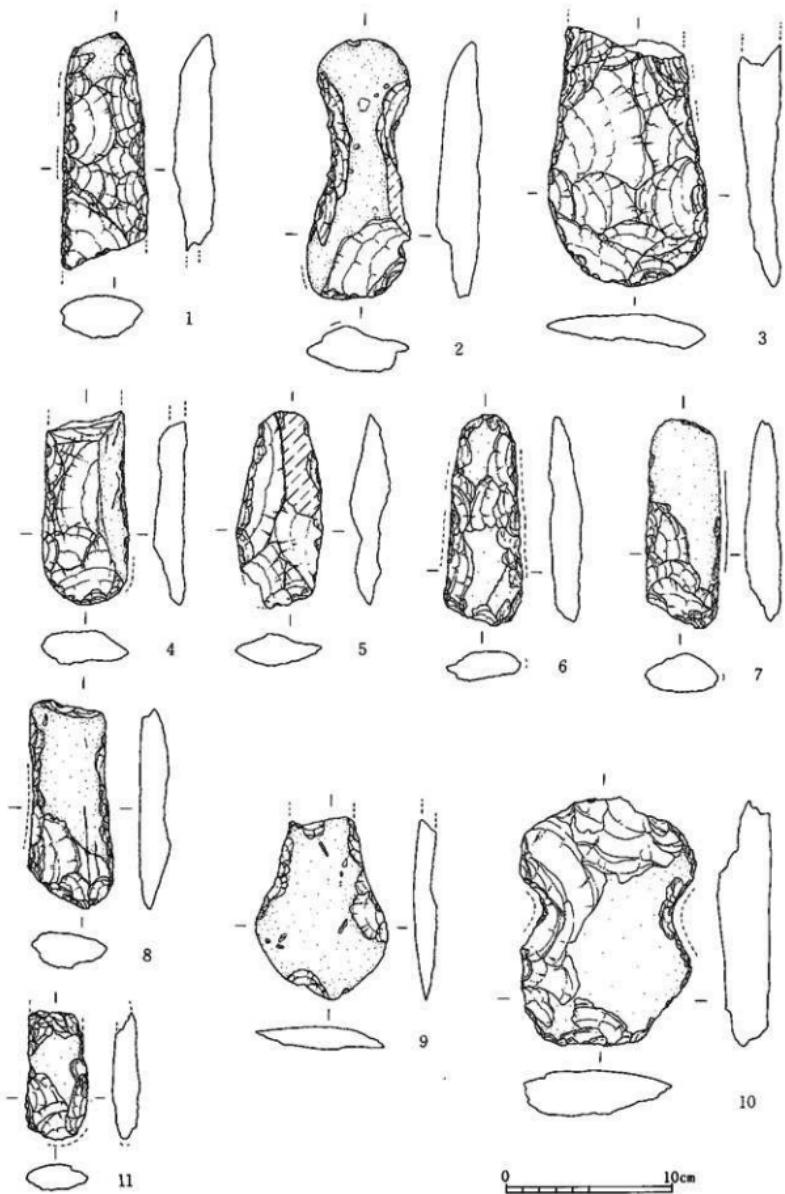


第10図 T J Y • A 溝址1出土遺物

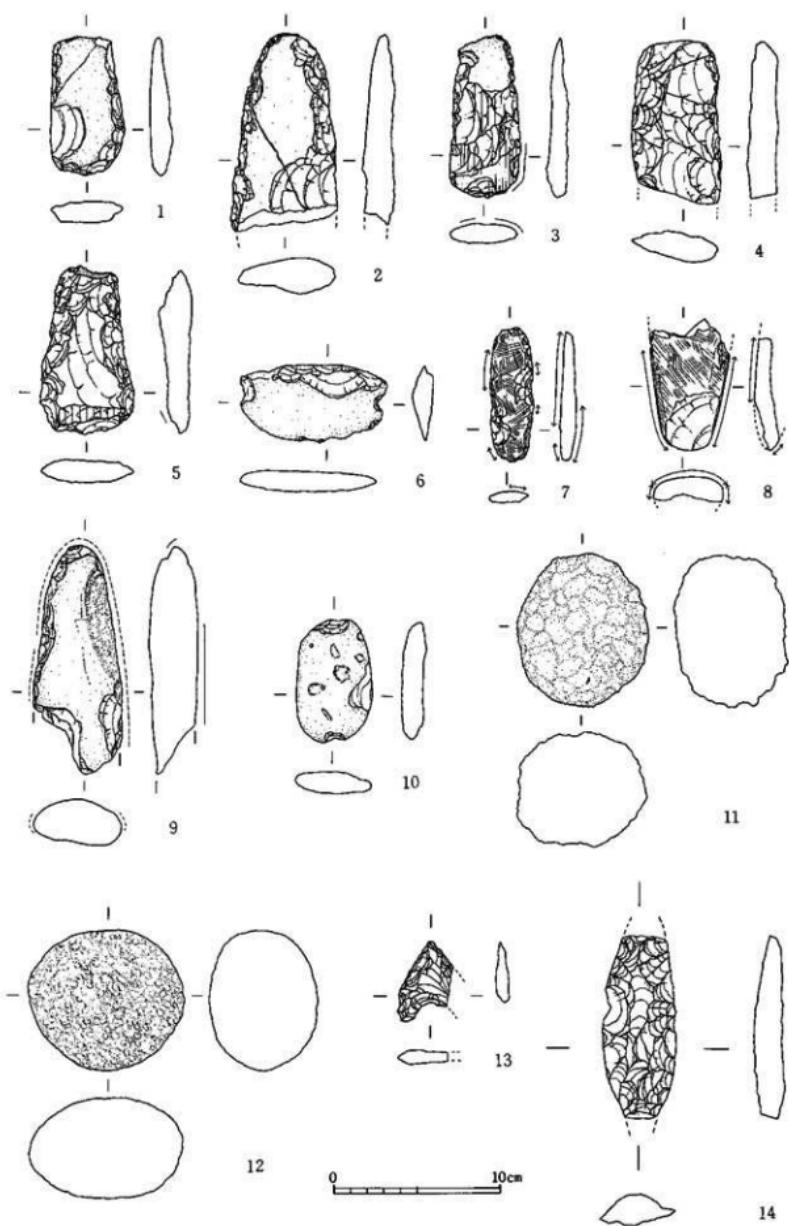


第11図 T J Y + A 出土遺物

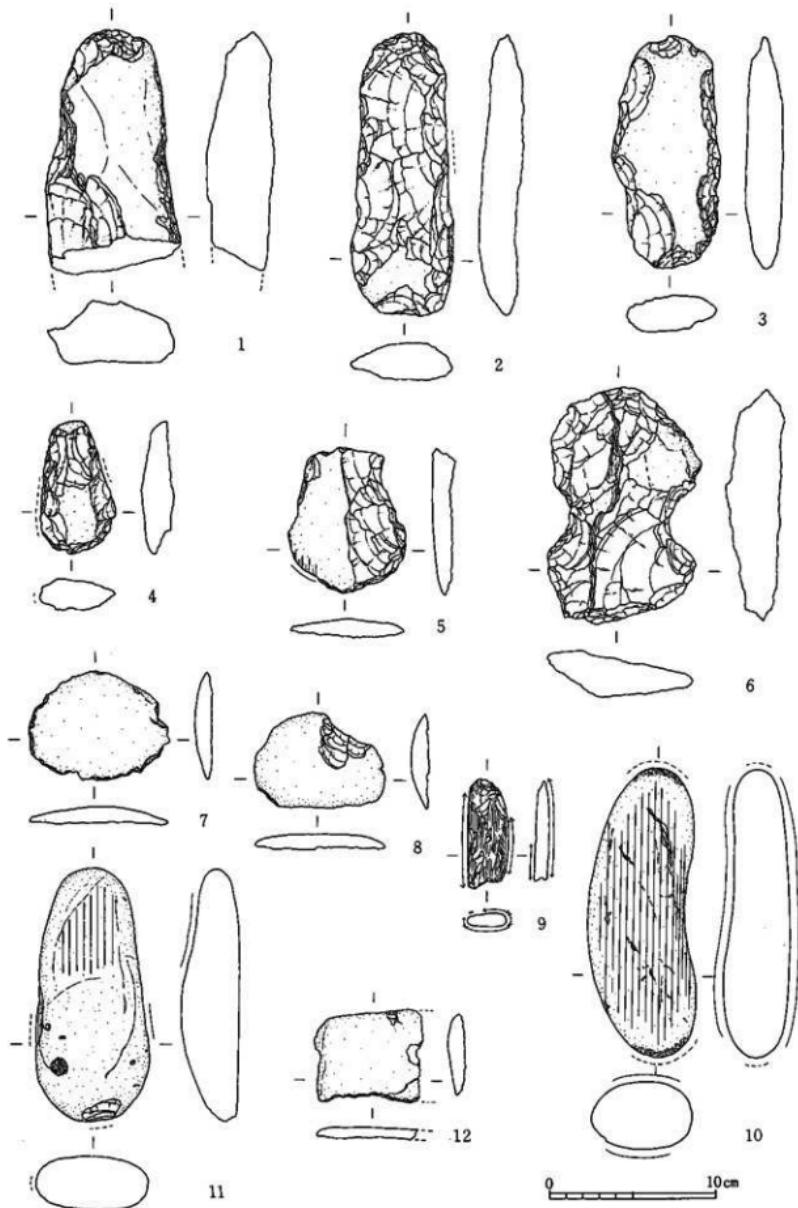
1~6 清址 1 7~14 造模外



第12図 TJY・A 造様外出土遺物

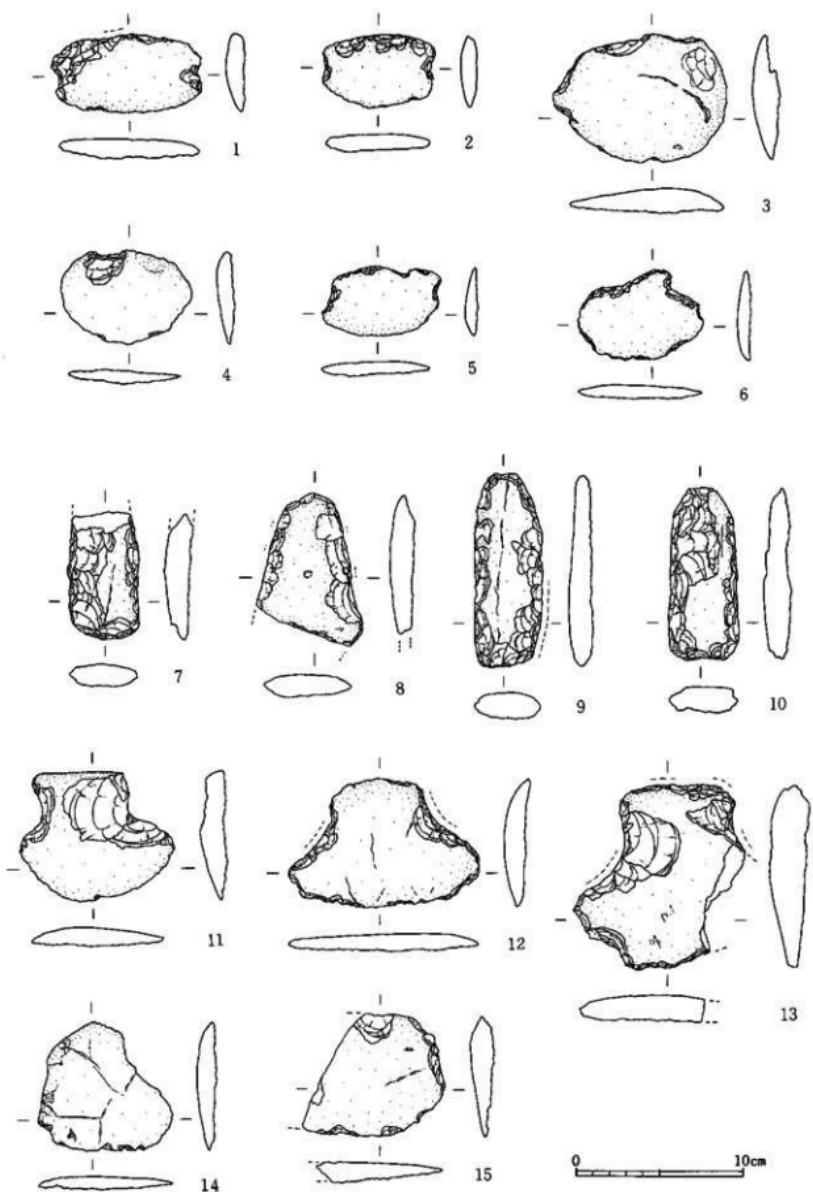


第13図 T J Y - A 遺構外出土遺物



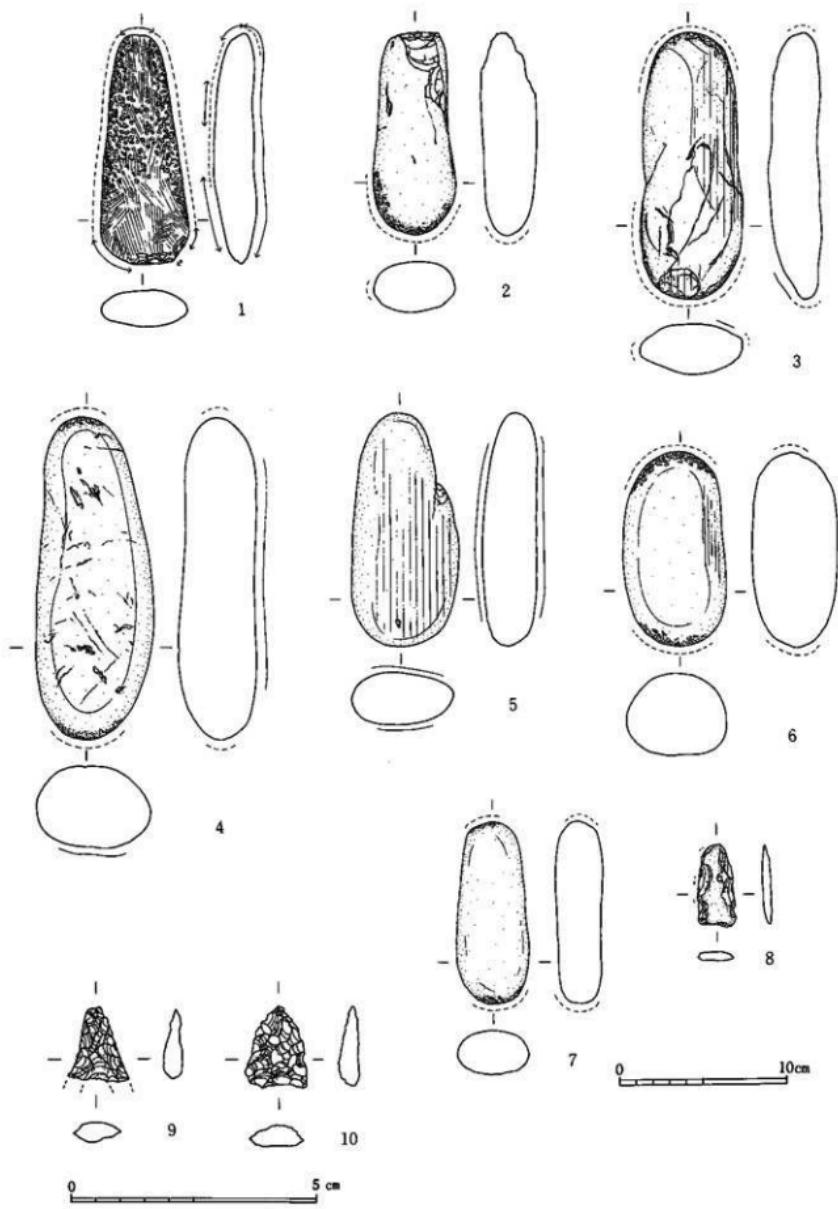
第14図 TAD・A 出土遺物

1~10 濃址2 11~12 濃址3

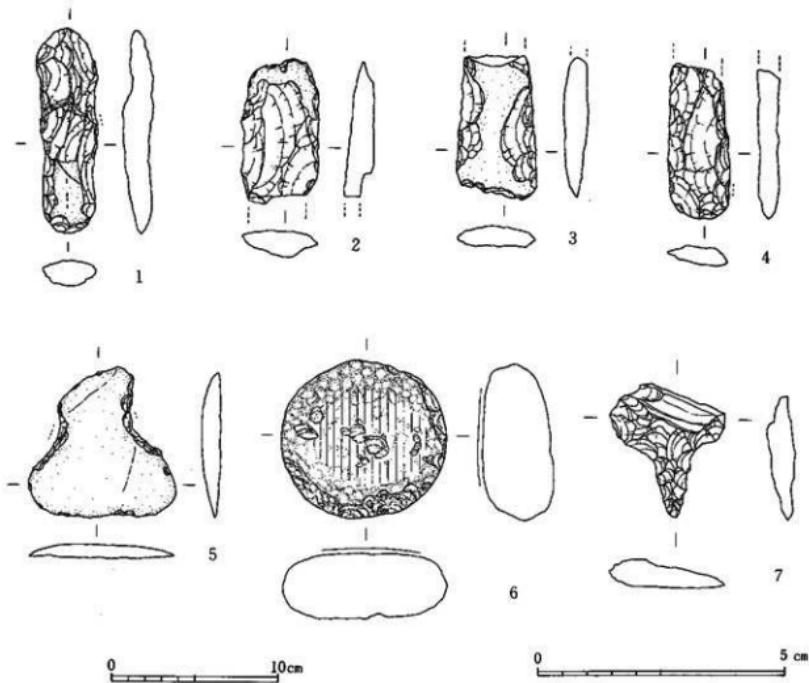


第15図 TAD・A 出土遺物

1~4 清社 5~6 土坑 7~15 造模外



第16図 TAD・A 遺構外出土遺物



第17図 TAD・B 遺構外出土遺物



1

2

3

0 5 cm



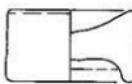
—



—



4



5



6

0 5 cm

第18図 T J Y・A 出土遺物

1・2・4 桁を伴う石組遺構 3 遺構外 5・6 清址 1

写 真 図 版



T J Y • A
調査前



T J Y • A
全景（上空から）



T J Y • A
全景（上空から）

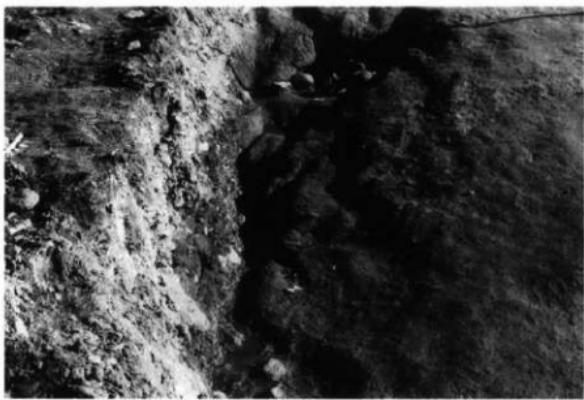
図版 2



T J Y · A
全景(部分)



T J Y · A
全 景



T J Y · A
溝 址 1



T J Y • A
杭を伴う石組遺構



T J Y • A
杭を伴う石組遺構（部分）



T J Y • A
調査スナップ

図版 4

T J Y・A
調査スナップ



T J Y・A
委託空中写真撮影
業務スナップ



T J Y・A
委託表土剥ぎ業務スナップ





T J Y・B
全 景



T J Y・B
調査スナップ



T J Y・B
委託表土剥ぎ業務スナップ

図版 6



T J Y・a トレンチ
調査 前



T J Y・a トレンチ
全 景



T J Y・a トレンチ
調査スナップ



TAD・A
全 景



TAD・A
全 景（部分）



TAD・A
全 景（部分）





TAD・A
溝 址 4

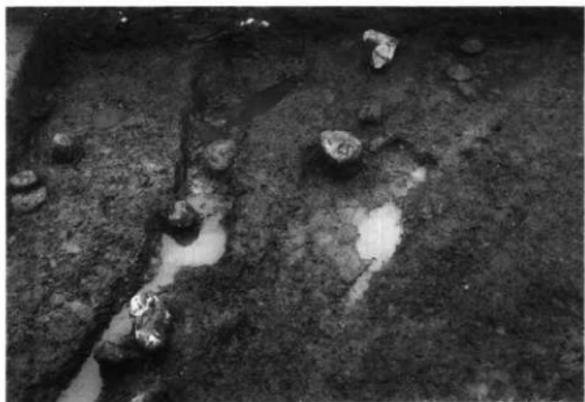


TAD・A
溝 址 5



TAD・A
溝 址 6

図 版 10



TAD・A
溝址 7・8



TAD・A
調査スナップ



TAD・A
委託表土剥ぎ業務スナップ

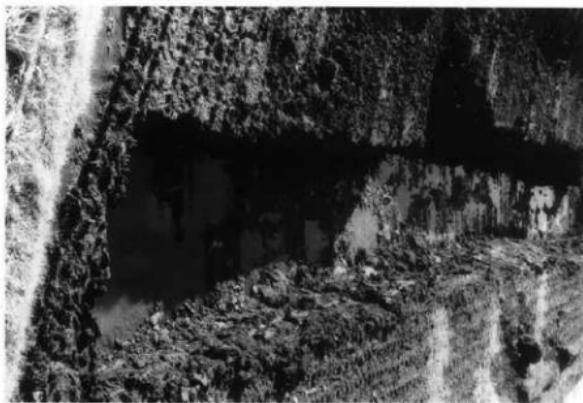


TAD・B 調査前



TAD・B 全景

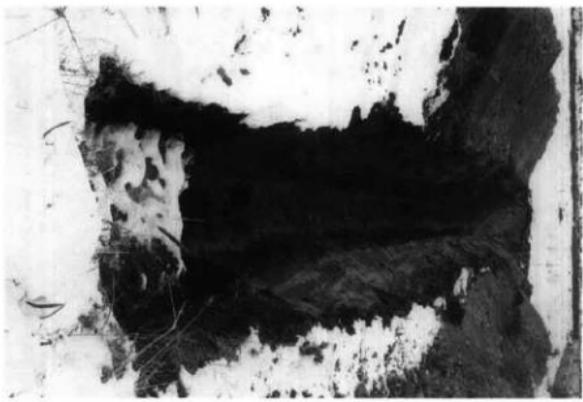
TAD・B I トレンチ 全景



TAD・B II トレンチ 全景



TAD・B III トレンチ 全景





TAD・h トレンチ
調査 前



TAD・h トレンチ
全 景

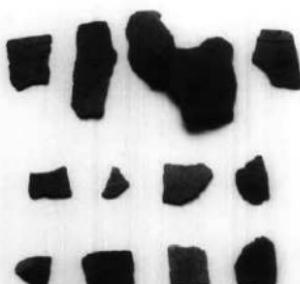


TAD・h トレンチ
委託表土剥ぎ業務スナップ

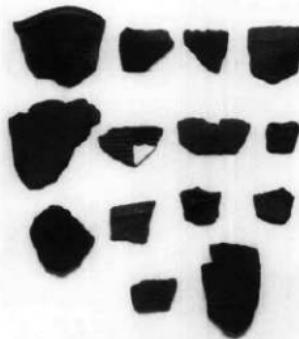
図版 14



T J Y・A 杵を有する石組遺構出土遺物



同 左



T J Y・A 清址 1 出土遺物



同 左



T J Y・A 遺構外出土遺物

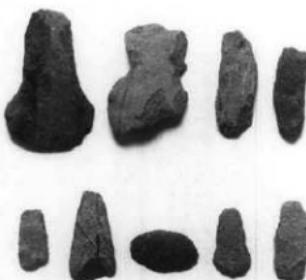


T A D・A 清址 3 出土遺物



TAD・A 造構外出土遺物

同 左



同 上

TJY・A 杭を有する石組造構出土遺物



TJY・A 杭を有する石組造構出土遺物



TJY・A 溝址 1 出土遺物

図 版 16



T J Y • A 溝址 1 出土遺物



同 左



T J Y • A 遺構外出土遺物



同 左



同 上



同 上



T J Y · A 遺構外出土遺物



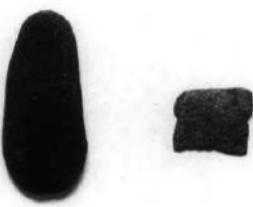
同 左



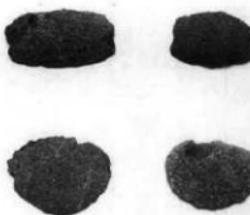
T A D · A 溝址 2 出土遺物



同 左



T A D · A 溝址 3 出土遺物



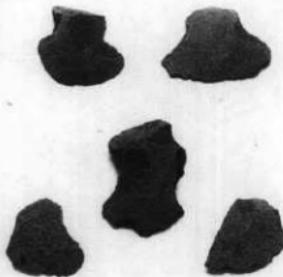
T A D · A 溝址 5 出土遺物



TAD·A 土坑1出土遺物



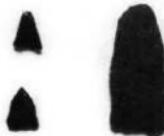
TAD·A 遺構外出土遺物



TAD·A 遺構外出土遺物



同 左



同 上



同 左



TAD・B 造構外出土遺物

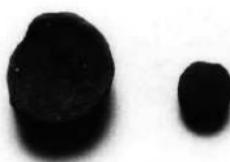


(左・中) TJY・A 杖を有する石組遺構 (右) TJY・A 造構外出土遺物



TJY・A 杖を有する石組遺構出土遺物 (表)

同 左 (裏)



TJY・A 溝址 1 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たつえじょう・たつえあだかいせき						
書名	龍江城・龍江阿高遺跡						
副書名	天竜川治水対策事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	吉川金利 吉川豊 馬場保之 下平博行						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL0265-(53)-4545						
発行年月日	西暦1997年3月28日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
たつえじょう	いいだしたつえ	2053		35° 27' 34"	137° 49' 56"	平成5年12月15日 から 平成6年4月21日	1,809 治水対策事業
龍江城	飯田市龍江						
たつえあだか	いいだしたつえ	2053		35° 27' 24"	137° 49' 50"	平成6年1月21日 から 平成6年10月13日	2,850 治水対策事業
龍江阿高	飯田市龍江						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
龍江城	散布地	縄文時代中期 から近世	杭を伴う石垣遺構 溝址	縄文土器 石器 平安土師器 須恵器	杭を伴う石垣遺構は、天竜川の渡船場の可能性がある。		
龍江阿高	散布地	縄文時代から 平安時代	溝址	縄文土器 石器 弥生土器 石器 奈良須恵器 平安土師器 須恵器			

龍江城・龍江阿高遺跡

平成9年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市教育委員会
長野県飯田市上郷飯沼3145

印 刷 龍共印刷株式会社
